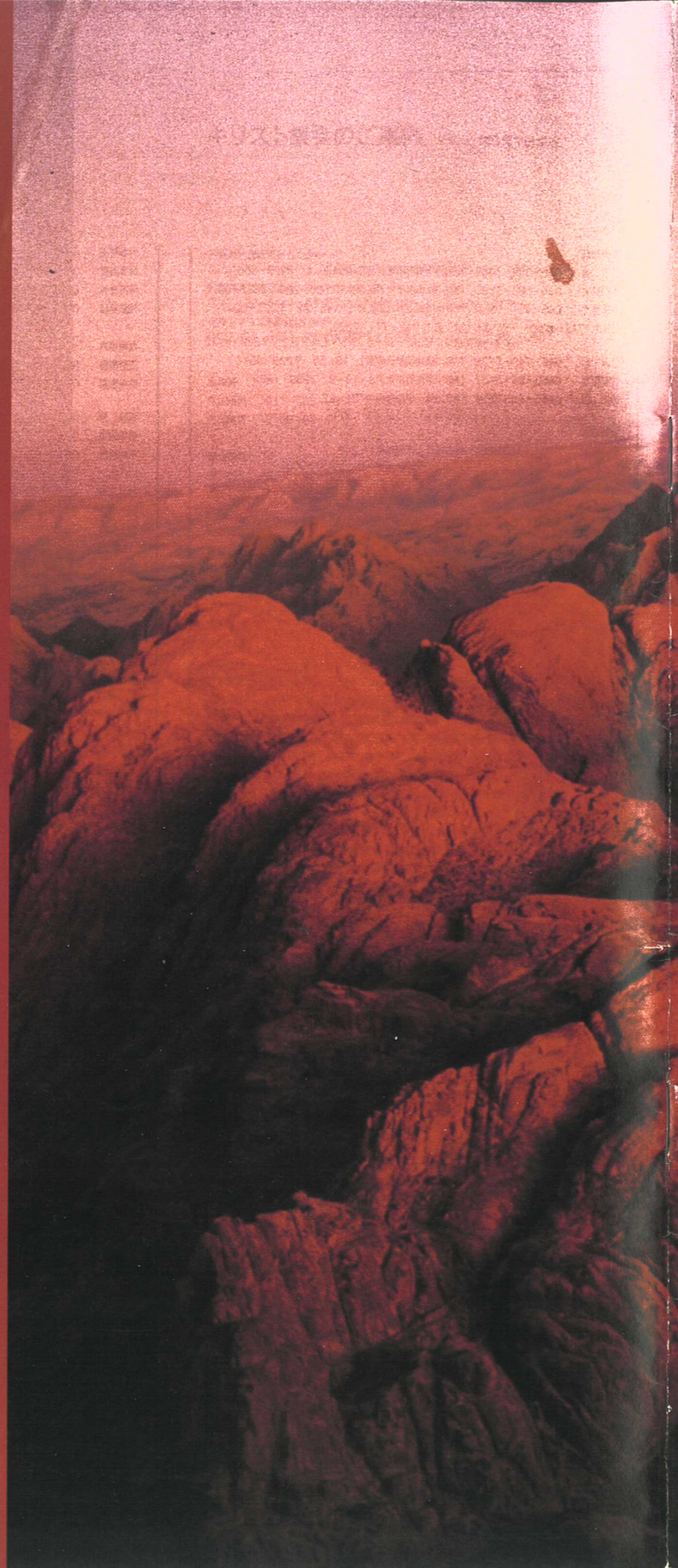
主は、生きておられる

Unser HERR lebt

vol. I

季刊誌
秋号

定価
150円
(本体143円)



quarterly magazine
2001 Autumn

創刊号

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

連載第1回 [モーセの十戒]

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

メッセージ

主は生きておられる 江藤善清

アダムとイブそしてあなた 古田公人

あなたは愛されている、
あなたはもう孤独ではない 重田定義

イエスさま、ありがとう! 片桐俊文

特集 フォトスケッチ

ヨーロッパ[よろこびの集い]

海外、国内[よろこびの集い]



Unser HERR lebt

主は、生きておられる

［創刊号］

「主は生きておられる」創刊にあたって

ゴットホルド・ベック

イエス様ご自身が、「わたしは、わたしの教会を建てる。」（マタイ16・18）と約束しておられますから、私たちは感謝でいっぱいです。キリスト集会の私たちは、ただ「主の器となり、主の通りよき管としてください」と心から願い、祈っています。

この雑誌は、「主は生きておられ、すべてを支配し、今も働いておられ、私たちを愛してくださっている」ことをお伝えし、証しして、一人でも多くの方々に、聖書と主イエス様のすばらしい救いについて知っていただくために刊行されました。

現在、キリスト集会は、北海道から沖縄まで、またグアム、バンコック、カナダ、アメリカなどにも広がり、主にある大勢の方々が同じ心と願いを持つようになったことは大きな恵みです。各地の集会の連絡のためにも、年に4回は出していきたいと願っています。雑誌の名前を考えていたとき、ある方から一枚のカードをいただきました。表紙には「みことばの扉」と書かれていて、その扉を開くと「主は生きておられる」と書いてあったのです。その方は、「私は娘を失ったとき、この事実をはっきりと確信することができた」と言われました。

「主は生きておられる」はドイツ語でEr lebtです。この二つの単語を一つにしたErlebtは、「体験、経験」の意味です。「私は、主は生きておられることを、体験した」と言える人は、まことに幸せです。

最近ドイツで、女性の新聞記者のKarin Lorentzさんと出会いました。彼女は私たちのために証しをしてくれたのですが、その題名は、まさにErlept=Er lept!だったのです。「主は生きておられることこそが、私の体験です」。Karinさんのお母様は主イエス様を信じている方で、ずっと娘のしあわせのために祈り続けてこられたのですが、娘さんの方は反発して自分勝手な生き方をするようになりました。それだけでなく、本を書きはじめて、「神は存在しない。聖書はでたらめな書物である」と証明しようと試みたのです。出版社も見つかり、いよいよ印刷されることになったその前の夜、突然、彼女は恐ろしい悩み、出口のない絶望を体験しました。彼女は言っています。「あの本を書きながら喜びもなかったし、平安もなかった。自殺しようという思いにも、さいなまれた」と。そして、その夜を境に、彼女の考え方、人生観はすべて変わりました。

イエス様を信じている人々が、前向きに生活することができ、生き生きとした希望を持っているのに対して、彼女は自分が実際にはみじめで、めくらで、絶望している者だと認めざるをえなかったのです。彼女は、本を印刷しないようにと頼み、それから彼女は、改めて聖書をむさぼるように読みはじめました。彼女は飢え乾いた心をもって夜昼聖書を読み、やがて主の愛に目覚め、悔い改めて罪の赦しを得ることができ、まことの喜びと主にある平安を自分のものにすることができたのです。

彼女のご主人のFriedrichさんも、昔のKarinさんのように、まことの神から遠く離れ、すべてを否定する人でした。しかし彼女は期待を持ってご主人の救いのために祈り、救いのお約束を確信して主に感謝するようになったのです。ドイツ・ミヘルスベルグの「よろこびの集い」には、日本から多くのキリスト集会の方々が集われましたが、みなさんでFriedrichさんの救いのために祈り始めました。その夜から、どうしてかはわからないがFriedrichさんの態度が変わった、とKarinさんは言っています。ご主人はその後も奥様といっしょに、イエス様を信じる者の集いに出るようになられました。Karinさんは書いてこられました。「日本のみなさまの祈りは、実を結んだのです」と。

たしかに「主は生きておられ」ます！



INDEX

巻頭メッセージ　連載第1回［モーセの十戒］

04　神の聖なる戒め　ゴットホルド・ベック

4人のメッセージ　信じておられる方へ

12　主は生きておられる　江藤善清

まだ信じておられない方へ

16　アダムとイブそしてあなた　古田公人

病気の方へ

20　あなたは愛されている、あなたはもう孤独ではない　重田定義

こどもたちへ

22　イエスさま、ありがとう！　片桐俊文

24　2002年1月～3月「メッセージ当番表」
2002年「よろこびの集い」予定一覧

3人の証し［私たちは信じています］

26　宮崎 千恵子［イエス様の奇しい導き］

28　伊野 朱美［主は生きておられる］

30　飯島 夏樹［まことの命に満たされて］

32　おいしいクリスマス　シュトレンを作ってみよう！

33　特集 フォトスケッチ
ヨーロッパ［よろこびの集い］
海外、国内［よろこびの集い］

38　日曜学校から　あおぞらひろば

40　クリスマスの意味　「私たちを救うために来てくださったイエス様！」

42　結婚式、葬儀に関する報告

43　祈りの課題　一緒に祈りましょう

44　キリスト集会のご案内
キリスト集会 本の紹介

46　全国の集会住所録

神の聖なる戒め

［モーセの十戒］1

ゴットホルド・ベック

姦淫してはならない。

盗んではならない。

あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。

あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。

あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。

あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

あなたの父と母を敬え。

殺してはならない。

ホレブ山から見たシナイの山々

はじめに、これから学んでいく「神の聖なる戒め」、モーセの十戒が記されている聖書の出エジプト記、20章の1節から17節までをごいっしょに読んでみましょう。

[1]それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
「[2]わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
[3]あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
[4]あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。[5]それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、[6]わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
[7]あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
[8]安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。[9]六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。[10]しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—[11]それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
[12]あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
[13]殺してはならない。
[14]姦淫してはならない。
[15]盗んではならない。
[16]あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
[17]あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」　（出エジプト　20・1～17）

神の聖なる戒めである「モーセの十戒」は、現代に生きる私たちにとってどのような意味を持っているのでしょうか。結論を先に言いますと、「モーセの十戒」は、「聖なる神のみこころの現われ」と言うことができます。

神のみことばである聖書は、終始一貫して一つのことを強調しています。それは、個人の生活、またさまざまな国民の生活のあらゆるできごとの背後に、「聖なる神のみこころが存在する」ということです。すべてのできごとは、その初めから終わりまで、聖なる神のみこころの完全な成就にほかなりません。

多くの人間は、「すべては聖なる神のみこころの成就である」ということを認めてはいるのですが、認めながらも心のどこかで残念だったり、あきらめたり、ため息をついたりしてしまいます。というのは、「神のみこころとは、私たち人間の利益とは反対のものであり、私たちを束縛するものだ」と感じてしまうからです。神のみこころによって、私たちの生き方が制限され、束縛され、損なわれると感じる人々が非常に多いのです。

しかし実際は、神のみこころは、その正反対です。神のみこころは、「まことのいのち、まことの幸せの必要条件」です。ちょうど自然にとって太陽が不可欠なように、人間にとって神のみこころは必要不可欠です。

私たちは神のみこころによって、まことのいのちを与えられ、今なお守られているのであって、それは神の永遠のご計画に基いてなされていることなのです。私たちの人生にとって、神のみこころは、栄光に満ちた目標です。神のみこころは、私たちがあらゆる危険と戦いを乗り越えていくための唯一の力です。そして神のみこころは、必ず成就されます。

ですから神のみこころは、私たちの人生を損なうものでは決してありません。むしろ反対に、神のみこころに逆らうことによって、私たちは自分の人生をめちゃくちゃにしてしまうのです。自己支配は必ず自己破壊を招きます。人間の自分勝手な意志、わがままこそが、私たちの人生を破壊するのです。

私たちの人生を通して、神のみこころが現わされるのなら、私たちの人生は完全で聖なるものだと言えましょう。主イエス様のこの地上における生涯がそうでした。神のみこころは主イエス様を通して現実に生きたものとなり、目に見えるものとなったのです。主イエス様の人生は聖なるものであり、完全なものでした。

世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。（ヨハネ　2・17）

ですから、すべて主を信じる者の願いは、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」（マタイ　6・10）
というみことばの通りとなるのです。

そして、このように真剣に祈り求めている人々は、神のみこころが具体的、現実的にどこにあるのか、何を意味しているのかを正しく知らなければなりません。

まず、神のみこころは、神が造られた大自然を通して明らかに示されています。無数の星々は、厳然として創造主の侵すことのできない法則に従って存在しています。すべての自然界は、そのすべてが神のみこころの下に置かれており、創造主が定められた通りに活動しています。こうした自然の法則の中から、神のみこころの永遠性を読み取ることができるのは、何とすばらしいことでしょう。この天地が造られて以来、ただのひとつも、主が造られた自然界の法則が変えられたり、修正されたり、無力になったりすることはありませんでした。

次に、多くの国々の歴史を通しても、神の永遠の法則を読み取ることができます。なぜなら、世界の支配は神のみこころの現われだからです。多くの国々は、神のみこころに従って起ったり倒れたりします。なぜそうなるかは、箴言に示されています。

正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。（箴言　14・34）
永遠の神のみこころを求める者は必ず祝福され、自分の利益だけを追う者は必ず滅び失せます。

次に、もう一つの神の法則を見てみましょう。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。（創世記　12・3）
このみことばは、アブラハムとその子孫、つまりイスラエルの民に与えられたものです。ユダヤ人を祝福する者は祝福され、ユダヤ人をのろう者はのろわれる、ということは、世界史によって証明されています。神のみこころは、一人の例外もなく、すべての人間の心に刻み込まれています。ですからたとえ聖書を知らなくても、福音を一度も聞いたことがなくても、人間は神のみこころを正確に知っているのです。そのことは、異邦人について聖書に記されている箇所を見れば明らかです。



モーセがもらった十戒。神の御手が……

1 神の聖なる戒め

彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。（ローマ　2·15）

すべての人間は、神の戒めを心の中に知っているのです。そして神のみこころを行なっているかどうかの責任を問われているのです。

このようにして私たち人間は、神のみこころを、自然界の法則を通して、また良心を通して知ることができます。しかし、神のみこころをもっとも詳しく、完全な形で知ることができるのは、神が人間にくださったみことば、聖書を通してです。なぜなら、聖書は神のみこころの表われだからです。ですから、神のみこころを知りたいと思うなら、聖書を読んでください。聖書こそが神のみこころを啓示するものです。聖書の中には、「わたしは…しよう。」という神のみことばが多く出てきます。これによって私たちは、神のみこころが何であるかを知ることができます。

神のみこころを表わす、「わたしは…しよう。」というみことばは、いつも最高の権威を持っており、「神がなさることは必ずその通りになる」という絶対的な必然性を示しています。そして主なる神のみこころ、「わたしは…しよう。」というみことばは、私たち人間にとっても、「あなたはそのようにすべきである。」という絶対的な意味を持つものになるのです。

したがって、神によって造られたすべての被造物にとって、神のみこころは命令を意味し、その命令は議論することの許されないものであって、その通り受け取って実行しなければならないものなのです。神のみこころから離れて自分勝手な道を行くなら、人間は破滅に至ります。

神のみこころに対する従順は、常に祝福であり、神のみこころに対する反逆は、常にのろいです。

なぜ、多くの人々、多くの家庭、さらには多くの国々が破滅に至るのでしょうか。

世界史の問題を考えるとき、ある人物、その人の家庭や周囲の人間、また関係する国々が、神のみこころに対してどのような態度をとったのか、つまり従順な態度をとったのか、あるいは反逆する態度をとったのかが、非常に重要な手がかりとなります。

そこで、主なる神は私たち人間に「何を望んでおられるか」が大きな問題になります。主のみこころは「モーセの十戒」の中に明確に示されています。「モーセの十戒」は、約3,500年以前、主なる神がイスラエルの民に対して、モーセを通してシナイ山でお与えになった「十の戒め」です。

主なる神は、一つの民を選ばれて、すべての民の模範となさいました。主なる神は、イスラエルの民を通してご自身のみこころを明らかにしようとなさいました。そして、主なる神の戒めを守る民は栄え、主なる神の戒めに逆らう民は滅びる、ということを示そうとなさいました。

イスラエルの歴史を見ると、イスラエルの民が神のみこころに従順であった時に栄え、神のみこころに従わなかった時に滅びたことがわかります。

主なる神は、イスラエルの民と一つの契約を結ばれました。

「あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。」（出エジプト　19·5）

このことは、主なる神のみこころでした。主なる神は、やがて救い主を地上に遣わすことを定められたイスラエルの民に対して、特別の目的を持っておられました。ですから主なる神は、イスラエルの民に対して道徳の模範だけでなく、「どのように神に近づくべきか」ということをもお示しになったのです。

創世記から申命記までの五つの「記」には、イスラエルの民に対する戒め、つまり神のみこころが明らかに示されています。これらの戒めの多くのものは、イスラエルの民のために書かれたものですが、それらの核心となっているのは「モーセの十戒」と呼ばれる戒めです。このモーセの十戒は、イスラエルの民だけでなく、すべての人間に当てはまる神のみこころを表わしています。ですからモーセの十戒は、あらゆる時代のすべての人間に対する戒めであり、命令なのです。

主なる神は、一つの民を選ばれて、すべての民の模範となさいました。主なる神は、イスラエルの民を通してご自身のみこころを明らかにしようとなさいました。そして、主なる神の戒めを守る民は栄え、主なる神の戒めに逆らう民は滅びる、ということを示そうとなさいました。

イスラエルの歴史を見ると、イスラエルの民が神のみこころに従順であった時に栄え、神のみこころに従わなかった時に滅びたことがわかります。

主なる神は、イスラエルの民と一つの契約を結ばれました。

「あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。」（出エジプト　19·5）

このことは、主なる神のみこころでした。主なる神は、やがて救い主を地上に遣わすことを定められたイスラエルの民に対して、特別の目的を持っておられました。ですから主なる神は、イスラエルの民に対して道徳の模範だけでなく、「どのように神に近づくべきか」ということをもお示しになったのです。

創世記から申命記までの五つの「記」には、イスラエルの民に対する戒め、つまり神のみこころが明らかに示されています。これらの戒めの多くのものは、イスラエルの民のために書かれたものですが、それらの核心となっているのは「モーセの十戒」と呼ばれる戒めです。このモーセの十戒は、イスラエルの民だけでなく、すべての人間に当てはまる神のみこころを表わしています。ですからモーセの十戒は、あらゆる時代のすべての人間に対する戒めであり、命令なのです。

主なる神は、モーセの十戒を人間にお与えになってから、これに代わる律法を与えられませんでした。主なる神は、いつでもどこでも当てはまるものとしてモーセの十戒をお与えになり、それを変えようとはなさらなかったのです。

主なる神のみこころは完全であり、したがって変更することができないものであり、また変更をする必要もないものです。神の基準は永遠です。

今から3,500年前に、主なる神は「人間のあるべき姿」をお与えになりましたが、それは主のみこころそのものであり、今もなお有効です。

「まことの人間」とは、どのようなものかを知りたいと思うなら、モーセの十戒を読んでください。主なる神が人間に何を要求しておられるかを知りたいと思うなら、モーセの十戒を見てください。

ある人がイエス様のみもとに来て、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と尋ねた時、主イエス様は「戒めを守りなさい。」（マタイ19·17）と答えられました。イエス様の答えは明快で論理的です。つまり、神の戒めを完全に守る者は神のみこころを行なう者であり、神の要求は満たされます。その結果、その人は神に義と認められ、永遠の救いにあずかります。

私たちが主なる神に従って何かをしたいと思うなら、その道ははっきりと示されています。「神の戒めを守れ」。このみことばに尽きるのです。



◀ イスラエル人の辿った経路

律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。（ヤコブ　2·10）

この世においても、裁判所に引き出された罪人が、刑法のすべての罪を犯しているということは、まずありえません。ですが、たった一つの法律を犯しただけでも罪であることにかわりありません。まして、聖であり義である主なる神の前に立っている私たちの罪の状態は、何と深刻なことでしょう。私たちの中でいったい誰が、「自分は神の戒めを完全に守り、一つの戒めも破ったことがない」と言える人がいるでしょうか。

だとすると、私たちはモーセの十戒に対して初めから敗北者として立たざるをえないのでしょうか。私たちのような罪深い人間が、モーセの十戒について学ぶことは意味があるのでしょうか。主なる神のみこころを、神が人間にいくら告げ知らせても、結局誰一人みこころを行なえないなら、それは意味があることなのでしょうか。多くの人はこのように考えて、「誰一人モーセの十戒を守ることができないのだから、十戒は無用なものである」と思うようになってしまいがちです。

このように、十戒は無用だと考えることにより、主なる神のみこころは、個人や国民の中で色あせてしまい、正しい生活の基準がわからなくなり、結局おかしなものが基準となってしまうのです。聖書はまた、その行きつくところも明らかに示しています。

モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いています。（ローマ　10·5）

しかし今まで、この地上で神の戒めを完全に守ることができた方は、ただひとり、イエス·キリストだけです。イエス様は、ご自身の行ないを通して義と認められた、ただひとりのお方です。イエス様だけが神の戒めの基準に完全に合格できた方でした。ですから主なる神は、イエス様に向かって「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」（マタイ17·5）と言われたのです。

人間は誰一人、神の戒めを守ることができません。私たち人間のうちには、神の戒めに逆らう心、避けようとする心、罪を犯そうとする心があるからです。

多くの人々は、幸せは、あらゆる束縛や権威からの解放、そして神の制限からの解放にあると思っています。しかし、まさにその思いこそが罪の本質の現われなのです。つまり、私たち人間が追及する理想と、神の理想とは正反対なのです。

このような愚かな幻想に陥らずに、真実を求める人々は、「神のみこころにかなった歩みをすること」こそがまことの幸せだと知っているゆえに、「神のみこころを実行したい」と願います。しかしこのような人々も、厳しい現実に直面すると、「人間が神のみこころを行なうことができない」という事実を認めざるをえなくなります。

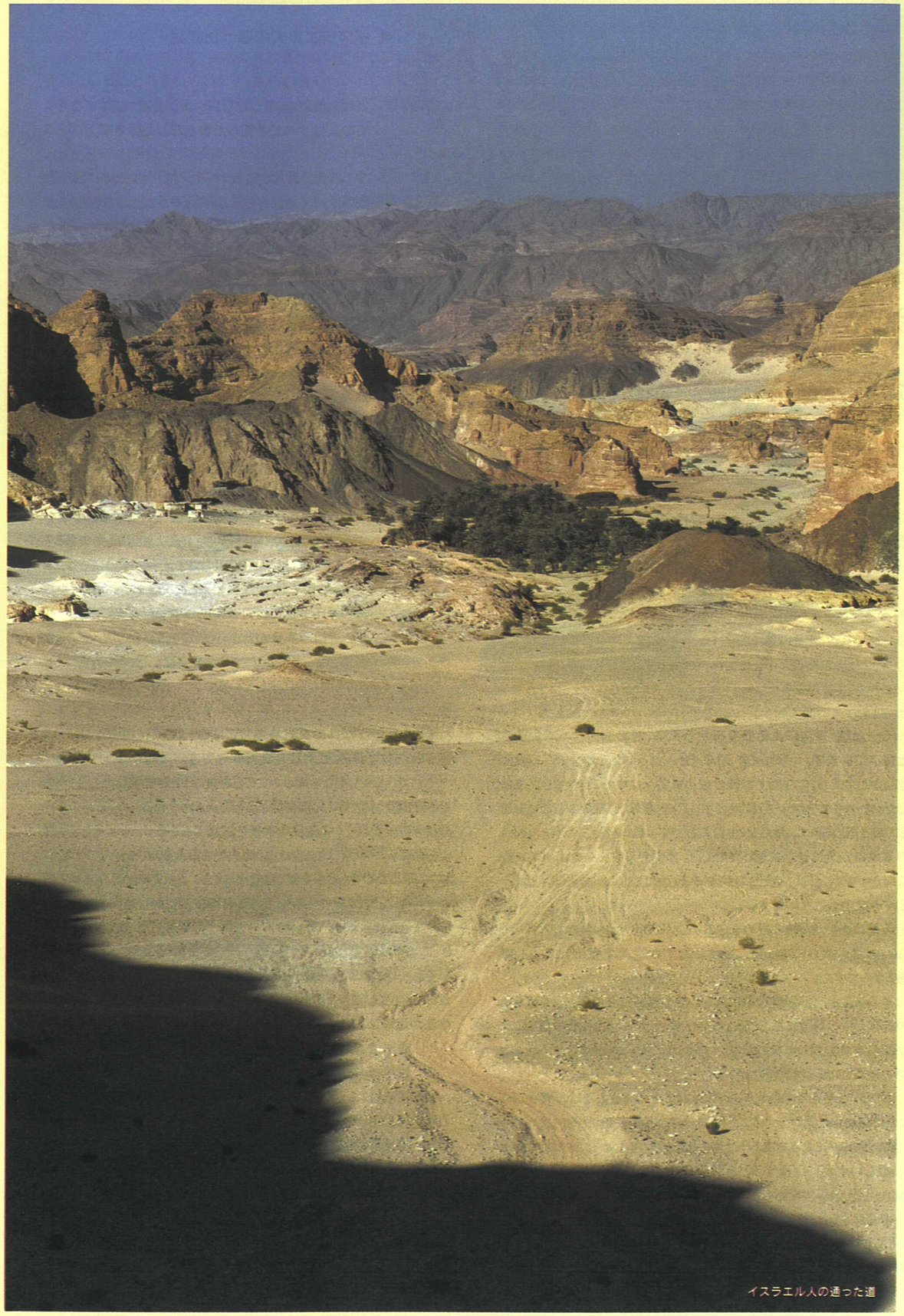
聖書によると、神の戒めを完全に守る者だけが、神の前に義とされるとあり、神の戒めに対して、ただの一度でも違反するなら、その人は債務のある者とされるとあります。

それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。（ローマ　1·25）

それではなぜ、聖なる神のみこころを知ることが必要なのでしょうか。その理由は、「罪深い人間が罪とは何であるかを知るため」であり、「自分自身の置かれている危険な状態を認識するため」であり、そして「救いを求めるようになるため」です。罪人である人間は、モーセの十戒によって罪とは何であるかを深く自覚することによってのみ、「主イエス様の十字架によって罪を赦され、主なる神の戒めに対し違反の無い者として認められる」という救いの恵みを受け入れるように整えられ、準備されていくのです。

それではこれから、「罪人である人間にとって神の戒めがどのような意味をもっているか」を学んでいきましょう。罪人である人間にとっての律法の意味は、五つに分けて考えることができます。

1　**律法は、罪の自覚をひき起こします。**
2　**律法は、罪が神に対する債務であることを明らかにします。**
3　**律法は、人間のうちにある罪を明らかにします。**
4　**律法は、罪人を訴えます。**
5　**律法は、恵みに導きます。**



イスラエル人の通った道

1　律法は罪の自覚をひき起こします。

私たちは、ものの長さを正しく知るために、「物差し」を必要とします。それと同じように、何が正しく、何が正しくないかを知るために、神の尺度である「律法」が必要なのです。現在、個人や家庭、さらに国民全体の生活に生じている大きな問題は、「人間が、何が正しく、何が正しくないか」を、もはや知ることができなくなっていることから生じています。みんながめいめい勝手に、「これは正しい、これは正しくない」ということを判断するようになってしまっているのです。万物の創造主である神ではなく、人間自身が万物の尺度、正義の尺度になっているのです。そして、「何が善で何が悪か」を自分で決める権利を主張する者は、他の人々にも当然のことながら同じ権利を認めなければならなくなります。

現代に生きる私たちは、一人一人が自分が考える「正義」を勝手に主張することに慣れてしまっています。そのことは、いろいろな実例が示しています。その結果は恐ろしいことになります。たとえば戦争犯罪者は、彼が確信する「正義」の尺度で行動したのだから、道徳的には罪が無いと言わなければならなくなるでしょう。戦争中は正義の英雄だった人が、終戦とともに他国の「正義」によって死刑になるということは、歴史にはいくらでも見られる事実です。

私たちの自分勝手な良心などは、まことに不確実で、相対的で、頼りないものです。なんの確たる基準もなく、そのときに自分が正しいと思ったことに従って行動するだけです。本来人間が持っている罪の性質によって、私たちの良心は、何も見えず、何も聞こえなくなってしまうのです。

今や私たちの良心は、主なる神のみ前に、「何が正しく、何が正しくないか」を判断できなくなってしまっています。ただ自分自身の勝手な判断により、または周囲の人々や所属する集団の判断により、「正しい」とみなされることを「正しい」と決めるだけに過ぎなくなってしまっています。

ですから、シナイ山でモーセの十戒をお与えになった主なる神ご自身の啓示は、今日なんと必要なことでしょう。モーセの十戒を与えられた神こそ、「わたしが主である。わたしは…しよう。」と言うことのできる、唯一の神です。

今、世界のすべての人々が、どうしても知らなければならないことは、主なる神の「絶対的な律法が存在する」ということ、そして永遠までも、「すべての人間の基準となる律法が存在する」ということです。

主なる神は、自ら人間のために語ってくださいました。主なる神は、石の板の上にご自身の指で十戒をお書きになりました。そしてその十戒を、モーセを通して全人類にお与えになりました。それゆえに私たちは、主なる神のみこころを知ることができ、何が正しく、何が正しくないかをはっきりと知ることができるのです。この十戒は、どんな子供でもわかるような簡単なことばで、聖なる神のみこころを明らかに示しています。

ちょうど主なる神が私たちを見つめておられるように、私たちも自分自身のありのままの姿をよく見ることができるように、主なる神が私たちの前に立ててくださった鏡、それこそがモーセの十戒です。

このモーセの十戒によって、何が罪であるかも明らかになります。

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。（ローマ　3･20）

ギリシャ語の「罪を犯す」というもとの意味は、「的に当たらない」こと、「的を外れる」ことを意味します。聖なる神のみこころは、十戒という律法の形で私たちに与えられています。ですから、罪とは、この聖なる神のみこころを行なわないこと、的を外すことにほかなりません。

私たちはこの神のみこころの鏡に映った自分自身を、あえて見ようとするのでしょうか。ダビデはあえてそうしました。そして祈りました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。
（詩篇　139･23、24）

このように祈ることは、真理への誠実な意思を表わします。真理に対して心を開くことこそが大切です。しかし大部分の人間は、薄暗いところで生活することを好みます。彼らは光の中に来ることを恐れ、自分の人生の深いところを隠し、神の光が入ってこないように、それを隠してしまおうと必死になっています。人は恥をさらしたくないのです。その状態は、かつてイエス様が嘆かれた当時も今も、まったく同じです。

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。（ヨハネ　3･19、20）

暗闇の中にとどまろうとすることは、何と恐ろしいことでしょうか。遅かれ早かれ後悔する時が確実にやってきます。それが来た時には、すでに遅すぎるのです。

病人が医者の診断に耳を傾けようとせず、自分は健康だと思い込んで、死に直面することはまことに悲劇的なことですが、はるかに悲劇的なことは、暗闇の中にとどまり、主なる神の光の中に来ようとしないこと、そして罪を隠そうとすることです。なぜなら、その時には肉体的な死だけではなく、霊的な永遠の死という破局がやってくるからです。

神の光の中に来ようとする者が、モーセの十戒を真剣に読むとき、それらを守り通すことが不可能だと気付かされ、絶望に陥ります。なぜなら、私たちが正直な気持ちで、十戒の一つ一つの律法を読むたびに胸を打たれ、私たちは罪深く、主の前に的を外れていると告白せざるをえないからです。

ここまで私たちは、「律法は、罪の自覚をひき起こす」ことを学んできました。次号からは、「律法は罪が神に対する債務であることを明らかにするもの」であり、「律法は人間のうちにある罪を明らかにするもの」であり、「律法は罪人を訴えるもの」であり、そして、「律法は恵みに導くもの」であることを、くわしく学んでいきましょう。

ゴットホルド･ベック
1930年シュトゥットガルトのミューリンゲンに生まれる。ミヘルスバッハ･ビルツのプロテスタントの教員養成所、次いでスイス･ベアーテンベルグの神学校を卒業。リーベンツェラー伝道会宣教師として来日。やがて、聖書のみことばと主ご自身との結びつきのみに基く福音と信仰のために、牧師制度、教会制度のないキリスト集会を始める。その後半世紀を日本伝道に捧げ、数千人以上の人々を救いに導き洗礼を授ける。「実を結ぶ命」「絶えず祈れ」ほか著書多数。妻ミンヘンさん。6人の娘さんの内3人は天に召されている。

主イエスを信じてる方へ



私も「主は生きておられる」体験をしました。

江藤善清

主は生きておられます。罪で盲目になっている人間の肉眼では見ることができませんが、そんなこととは関係なく、主は生きておられるということは厳粛な事実です。「わたしをためしてみよ。」と主は仰せられます。

私たちは、砂糖か塩か外見ではわからないときに、味見してためしてみます。ちょっと味見しただけで、どちらか瞬間的にわかります。

「ためしてみよ。わたしが生きて働いているかどうかためしてみよ。」と主は私たちに問いかけ、迫まって来られます。そして、ためした人たちは皆例外なく「まさしく主は生きておられます!主は私たちの祈りに答えてくださいます!主の答えは最善です!」と、主の前に改めてひざまづいてこうべを垂れ、心の目で見上げて賛美の歌を歌わざるを得ません。ひとりひとり人間の常識ではあり得ないことを体験させられて、閉じた冷たい鉄の扉のようだった心の目が開けられた瞬間、「主は生きておられる」と心の底から賛美せざるを得ません。

私も、たくさんの不思議な体験を通して「主は生きておられる」ことを実感させていただきました。その中に、死にかけていた長男をよみがえらせていただいた、という事実があります。身体的に元気にしていただいただけでなく、霊的にもよみがえらせていただきました。「生きておられる主」に死にかけていた長男をすべてお預けしたその結果は、私たちの思ってもみなかった素晴らしいものでした。10年後の今日も、長男のために主の備えていてくださったことのすごさと完全さを日々体験させられて、感謝と賛美を新たにしております。

新約聖書の中のマタイの福音書にもマルコの福音書にもルカの福音書にも出てくる「ヤイロの娘がよみがえらされた」という驚くべきことが、2000年の時間を超えて、ユダヤ人と日本人という民族と場所を超えて、「主が生きておられる」という事実の故に、私たちの上にも現実となる、ということを実体験させていただいて驚嘆しております。「主に信頼するものは失望させられることがない」「聖書に書いてあることはすべて真実である」ということは誠に本当であります。

ヤイロに恐ろしい試練が

イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、大ぜいの人の群れがみもとに集まった。イエスは岸べにとどまっておられた。すると、会堂管理者のひとりでヤイロという者が来て、イエスを見てその足もとにひれ伏し、いっしょうけんめい願ってこう言った。「私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。娘が直って、助かるようにしてください。」そこで、イエスは彼といっしょに出かけられた・・・
(マルコ5・21〜24)

ヤイロという人には12歳になる娘がいました。おそらく彼にとっては可愛くて可愛くて宝のような存在であったことでしょう。ところがその娘が死にかけています。ヤイロにとっては予想もしていなかった恐ろしいことです。自分の人生設計においては、あってはならないことです。年長者であり親である自分の方が、(この子に見取られながら)先に死んでいく、というのが彼にとっては当然のことでありました。まだ12歳という年端もいかないわが子が先に死ぬ、ということは、絶対に受け入れられないことです。

ヤイロは会堂管理者であった、とあります。私たちにはそれが何を意味するのか実感できませんけれども、当時のユダヤ人にとっては、会堂(シナゴーグ)は社会の、この世の中心的な存在でありました。だから、そこの管理者という立場は、ユダヤ人社会のリーダーのような存在であったようです。彼は旧約聖書に精通しており、たびたび説教もし、苦しんでいる人々から相談も受け、彼なりにアドバイスもしていたことでしょう。しかし、問題が自分の身の上に突然ふりかかってきたときに、それらの知識も社会的な地位も実はまったく無力である、ということを徹底的に知らされました。

ヤイロの耳に主の噂が

そのとき彼の耳に、ナザレの人イエスというお方が、「会堂で律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられ」、「人々はその教えに驚いた」ことが伝わって来たことでしょう。会堂で汚れた霊につかれた人が大声でわめいていたときに、そのお方が彼を叱って「黙れ。この人から出て行け。」と言われると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげてその人から出て行き、その人は正常になった、というニュースも伝わって来たことでしょう。

シモンとアンデレの家で、熱病で床に着いていたシモンのしゅうとめに、このお方が近寄り、その手をとって起こされると、すぐに熱がひき、しゅうとめは人々をもてなした、ということも伝わって来たことでしょう。



ひとりのらい病人が、このお方のみもとに来て、ひざまずいて「お心一つで、私をきよめることがおできになります。」とお願いしたときに、このお方は深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「私の心だ。きよくなれ。」と言われると、ただちにそのらい病が消えて、その人はきよくなった、という信じられないようなニュースも耳に入って来たことでしょう。

カペナウムという町で、そのお方がある人の家でお話をしておられたときに、4人の人がひとりの中風の病人をかついで来たが、多くの人々で戸口まですきまもないほどだったため、4人は病人をかついで屋根に登り、そのお方がおられるあたりの屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろした。このお方はその信仰をご覧になって、病人に「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで家に帰りなさい。」と言われると、彼は起き上がり、すぐに床を取り上げて、皆の見ている前を出て行った、ということもビッグニュースとして伝わって来ていたことでしょう。

ゲラサの地に汚れた霊につかれて墓場に住みついていた人がいて、足かせや鎖でつながれていたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまって、夜昼となく叫び続け、石で自分の体を傷つけていたが、そのお方が「汚れた霊よ。この人から出て行け。」とひとこと叱られると、その狂人が正気に返った、という驚くべきできごとも耳に入って来ていたことでしょう。

それらのことを聞いて、ヤイロは「娘のことで自分も是非に・・・」と思っていたことでしょう。そのとき、舟でそのお方が自分の住んでいる町にやってこられる、という噂を聞きました。「どんなことがあっても・・・・」ヤイロは必死にそのお方を捜し、とんで行って、そのお方の足もとにひれ伏して、一生懸命お願いしました。そのとき、ヤイロの頭の中には、ふだん自分が説教もし、教えてもいる人々の面前で、他の人に助けを求めているのを見られるのは恥ずかしい、というような人間的な思いは少しもなかったことでしょう。その純粋な願いを聞かれて、主はただちにヤイロといっしょに出かけられました。

長血の女が割り込みます

その途中、12年の間長血をわずらっていた女が主に助けを求めてとびこんで来ます。群衆の中に紛れ込み、うしろから、主の着物に手でさわります。すると、すぐに血の源がかれて、ひどい痛みが直りました。
この女にとっては命拾いでしたが、「一刻も早く」と急いでいたヤイロは、この足止めにそばでやきもきしていたことでしょう。案の定、そこへヤイロの家から人がやって来て申します。「**あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょう**」
(マルコ5・35)

事態は一変します

この瞬間に、このできごとの様子は一変しました。攻守ところを変えました。これまではヤイロが能動的で主は受動的でした。しかし、「娘が死んだ」という知らせに接するや否や、主が能動的になられ、ヤイロや周りの人々が受動的に一変しました。これまでヤイロから説明されお願いをされていたお方が、逆にヤイロを説得されるお方となられました。尊敬されあがめられていたお方が、人々から「あざ笑われる」お方に激変されました。人々を助けようと思っておられたお方が、人々を追い出すお方と変わられました。この瞬間から、主が主導され始めました。

イエスは、その話のことばをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。「恐れないで、ただ信じていなさい。」(マルコ5・36)

神と人との間に無限の隔たりが

「恐れないで、ただ信じていなさい。」主がおっしゃったこの短いお言葉に、神と人との間にある無限の隔たりが凝縮しています。娘が死んだ、という厳然たる事実を知らされて、人はただ、「これですべてが終わった。もうどうすることもできない」と絶望するのみです。「人々は取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりしていた。」とその場の状況を聖書は端的に描写しています。

ところが神なる主にとっては、それからが始まり、です。目に見えないものを見ておられるお方には、「死は終わりではなく、むしろスタート」です。主は、泣いたりわめいたりしていた人々に対して、こう言われました。

「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです。」
(マルコ5・39)

目の前の肉眼で見えるものしか見ることのできない人々と、目で見えないものを見ておられるお方の間に、どうしようもないギャップがあります。真の神様を知らない人々と、



真の神様その方でいらっしゃるお方との間には天と地ほどの落差が存在します。

強制収容所で キリスト者の見たものは

ある強制収容所の壁に、あるキリスト者が次のような短文を刻み込んでいたことが発見されました。

私は、今は、太陽が雲でさえぎられて
見えないとしても、その上で輝いていることを
確信している。
私は、今は、「愛」が
与えられていないとしても、
それが自分にとって存在していることを
確信している。
私は、今は、神が私に語りかけて
おられないとしても、
神様が存在なさることを確信している。

この世の地獄のような状況下にあって、主にのみ望みを託したキリスト者に、主は「目には見えないもの」を見させて下さいます。目に見えるものは移ろい行くもの、目に見えないものこそ価値のある永遠に続くものであることを見させてくださいます。

ヤイロの家であり得ないことが

しかし、このヤイロの家に集まっていた人々は、目に見えるものしか見えない人たちでしたから、「子どもは死んだのではない。眠っているのです。」と言われても、その真の意味がわかりません。それを聞いて、人々は「イエスをあざ笑った。」とあります。しかし、それに続いて、恐ろしいことが書いてあります。

人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなを外に出し‥‥（マルコ5･40）

この「みんなを外に出し‥‥」の原語の動詞は、ある聖書の研究者によりますと、「**それから、イエスは宮にはいって、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し‥‥**」（**マタイ21･12**）の「追い出し」と同じ動詞が使われている、ということです。

主は、優しく「出て下さい。」と言われたのではなくて、激しく追い出されました。この同じ動詞は、同研究者によりますと、主がサタンと対峙なさるときに38回も使われているそうです。主が神様のみこころを行おうとなさるときの厳しさを示しています。主の優しさと主の厳しさ、いずれも私たちの思いをはるかに超えるものでありましょう。

イエスはみんなを外に出し、‥‥‥子どものいる所へはいって行かれた。そして、その子どもの手を取って、「タリタ、クミ。」と言われた。（訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい。」という意味である。）すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。12歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに包まれた。（マルコ5･40～42）

主が栄光を現わされると

主がひとつの栄光をお現わしになりました。このようなことは、現在でも起こされています。

私たちが大切にするものを取り去られようとするとき、目に見えるものだけを見ていると、私たちもまた「取り乱して」しまいます。人間の常識のレベルで受け取ろうとするとき「泣いたり、わめいたり」してしまいます。しかし、主イエス様にすべてをおゆだねするときに、事態は「これですべてが終わった。もうどうすることもできない」と人の目には見えるようになっても、主は私たちに「恐れないで、ただ信じていなさい。」とおっしゃいます。

ヤイロが主のもとに行ってお願いをし、主はただちにヤイロの家に向かわれましたが、長血の女が割って入って主のお時間を取っている間に、娘は死んでしまいました。ヤイロや彼の家にいた人々はみな落胆の底に突き落とされたことでしょうが、これはその後に主がより大きな栄光を現わされるためでした。関係者が皆、より大きな賛美を主に捧げるためでした。子どもがまだ生きているうちに主が来られて回復させていただくのと、死んでしまったのを生き返らせていただくのとでは、関係者の主に対する賛美と感謝には雲泥の差がありましょう。

私たちにもまったく同じことが起こされます。私たちが問題を抱えて主のもとに行くときに、主のお答えが引き延ばされることが往々にしてあります。事態は一見ますます悪くなるように見えます。以前よりももっと絶望的になった、と思えるようになることがしばしばでしょう。ヤイロたちが経験したように‥‥。

しかし、それは主がその後でより大きな祝福をくださるためであります。私たちを、いったん完全に死なせるためであります。私たちが死んだときが主のみわざの始まりです。主はご自身のお仕事を始められるために、私たちが死ぬことを、ただひたすら待っておられます。今、この瞬間も……。



私たちの目指すところは

私たちは主を知っていても、何か性質の異なった問題が降ってきますと、自分が死ぬ、ということがいかに難しいか、を知らされます。そしてそれは自分の罪の深さ恐ろしさがいかに大きいものであるか、を知らされるものでありますが、私たちキリスト者の目指すべきゴールは、「いかに早く自分の思いを捨てて、死に、主に主導権をとっていただくか」でありましょう。そのとき、主は私たちひとりひとりに、「タリタ、クミ。」と仰せくださいます。死んだ私たちの手を取って生き返らせてくださり、立ち上がらせてくださいます。

天国でヤイロたちに会いましたら、彼らは口をそろえて言うことでしょう。

「主が遅れられたときには正直やきもき、いらいらしましたが、娘がいったん死んでしまったことは、私たちにとって本当に恵みでした。それによって私たちは本当の主を体験することができました。」

今、逆境の中にいらっしゃる方もおられることと思います。しかし、そのときこそ、今こそ、祝福の始まりです。一度死んで主と共によみがえらせていただくことの麗しさは、なんとも言葉で表現できないことでありましょう。

彼（主）に信頼する者は、失望させられることがない。（ローマ9･33）

ハレルヤ!

追記

「主はよみがえられた」ことは私たちにも見せてくださいます。

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。‥‥ 御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんなさい。」（マタイ28･1～6）

‥‥マグダラのマリヤは‥‥墓から石が取りのけてあるのを見た。それで、走ってシモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。‥‥そこでペテロともうひとりの弟子は……墓のほうへ行った。ふたりは‥‥墓にはいり‥‥見て、信じた。（ヨハネ20･1～8）

主のおからだが亜麻布に包まれ納められた墓に、2人のマリヤは安息日が終わるや否や出かけました。彼女たちは、墓の入口に大きな石がころがして置かれ、封印されていることを知っていましたので、“墓の入口からあの石をころがしてくれる人が誰かいるでしょうか”と心配しながらやって来ました。そのとき、大きな地震が起きました。主の使いが石をわきにころがして、入口を開けてくれたときに起きた地震でした。

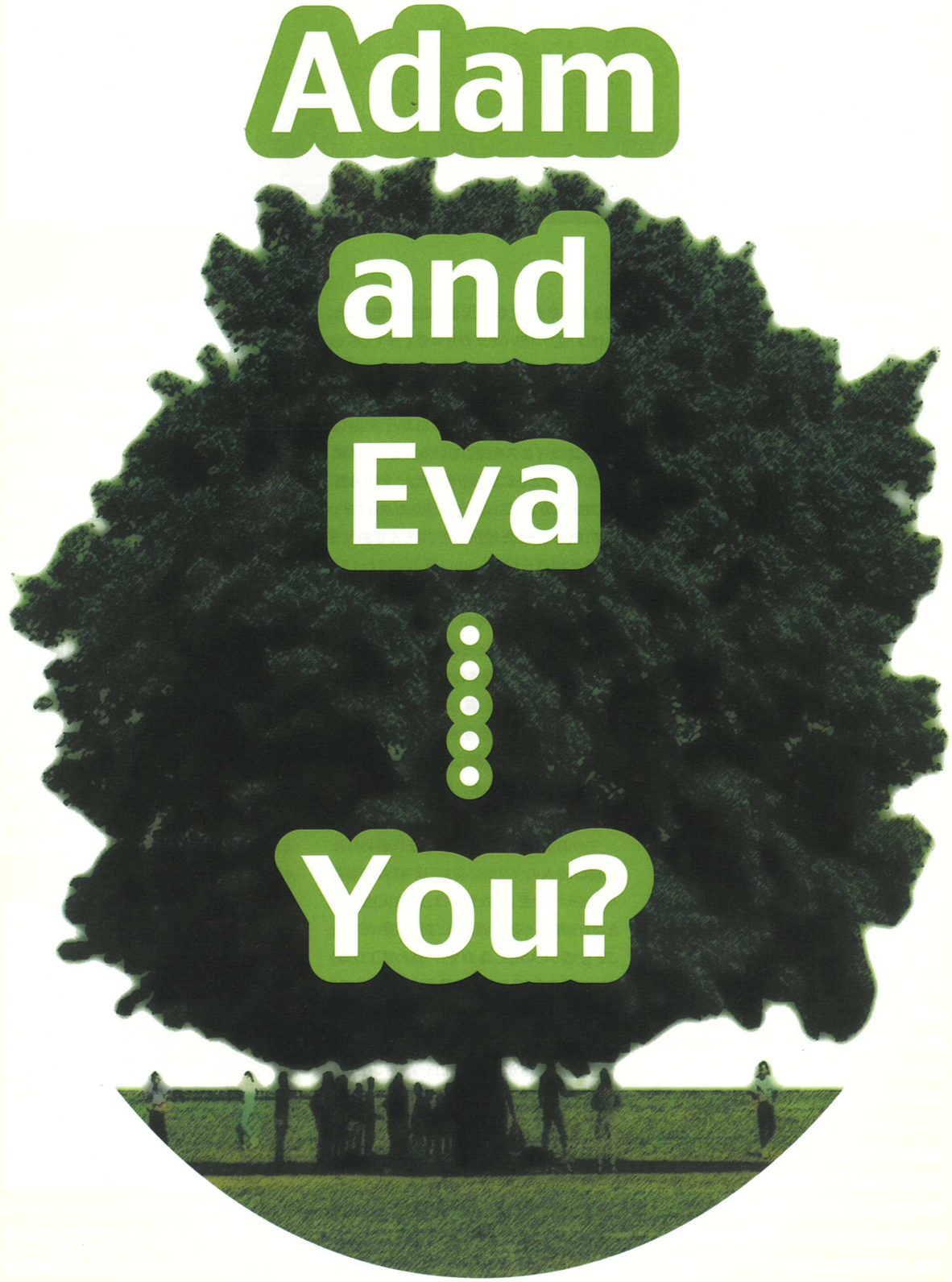
聖書をあまり注意せずに読みとばしていると、大きな石が動かされて入口が開いたのは、主が外に出られるために天使が動かしたのだろう、と想像しながら読まれた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、主が外に出られるのには、石が入口をふさいでいてもいなくても関係がありません。もう一度読み直してみますと、明言してはありませんが、石が動かされたのは、マリヤたちやペテロとヨハネが墓の中に入って「見て、信じる」ためであったことが読み取れます。そのために、すでに外に出ておられた主は、マリヤたちが来る直前に天使を天から送って、地震を起こしながら石をわきにころがされ、彼女らや弟子たちが中に入れるように準備をしてくださった、ということに気がつきます。「主がよみがえられて生きておられる」ことを弟子たちにお見せになるために‥‥。

そして、私たちのためにも、主はいつでも石をころがしてくださいます。もしわたしたちに「主が生きておられる。」ことを確認したい、と願う心があるときに‥‥。

マリヤたちが、旅が禁じられていた安息日が終わるのを待ちに待って、翌日のまだ暗い未明、イエス様のもとに一刻も早く行きたい、と道を急いでいた、その同じ心を主が私たちの中にご覧になるときに‥‥。



江藤善清　経営コンサルタント
福岡県出身、植木中、鞍手高、東京大学教養学科卒、東芝入社（後退社）、米カリフォルニア大学大学院（フルブライト留学生）、マドリッド大学（スペイン政府招聘留学生）



アダムとエバ、そしてあなたは

古田公人



神は『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。･･･』と仰せられた。（創世記1･26）

神はほんとうにそう言われたのですか

「エデンの園でアダムとエバが木の実を食べた」という話は絵画などでご存知の方も多いと思います。この旧約聖書の創世記にある記事から、「生きる」ということについて考えてみたいと思います。

「神さま」と呼ぶべきお方がほんとうに存在するなら、それは天と地をお造りになった方であるにちがいないと考えるのは当然でしょう。聖書には、世界はすべて神さまがお造りになられたと記されています。空も星も、山も海も、そして私たち自身も神さまによって創造されました。ですから、私たちは何かに打ちひしがれているときや、気持ちがふさいでいるときにも、そのことを思いおこすとうれしくなります。なぜなら、造られたものはお造りになった方のものに違いない、お造り下さった方は造ったものをお忘れになるはずがないし、いつも心にかけていてくださるに違いないと確信できるからです。

聖書は神さまがどのような思いで人間をお造りになったかを表わすために「**神は『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。･･･』と仰せられた**」（**創世記1･26**）と記しています。神さまがご自身の姿に似せて人間をお造りくださったということは、人を完全なものとしてお造りくださったということです。聖書を通して、神さまがどれほど深い愛を込めて人間をお造りくださったかを知ると、私たちは心からほっとする思いがします。しかし、造られたものはお造りくださった方が理解できなかったように思われます。人（アダムとエバ）は神さまの御心を疑い、それればかりか自分も神さまのようになりたいと思ったのです。そのいきさつは聖書に次のように記されています。

蛇は女（エバ）に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその木の実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。（創世記 3･1～6）

ここの蛇と女との会話のなかで注意したいことが二つあります。一つは「神はほんとうにそう言われたのですか」と問いかけることによって、蛇が女を会話に引き込んだことです。この問いかけが、人を罪におとしいれるきっかけになったのです。この言葉は「それはおかしい。神さまがそのようなことをおっしゃるはずはない」という意味を含んでいます。蛇はこう語ることによって、女が神さまのことばに疑いを持つように仕向けました。蛇と語り合ううちに、女は神さまの心がわからなくなりました。女が出した結論は「神さまはうそをついておられる、食べても死にはしない」というものでした。もし、そうでなかったなら、女は決してその木の実を食べなかったでしょう。まして、夫に与えることなどありえなかったでしょう。しかし、女は自分の意思で木の実を食べ、その実を受け取った夫もまた自分の意思で食べました。こうして二人は神さまのみことばにそむいたのです。

同じようにサタンは私たちにもささやきます。サタンは、私たちがイエス様の愛を知って幸せになることを喜びません。ですから、なんとしてでも、私たちの心をイエス様から離そうとします。そのための常套手段が「ほんとうに神さまはそう言われたのですか」というたぐいの問いかけだということを、このところから知らされます。サタンは神さまの愛を疑わせることが、私たちを不幸にするもっとも確実な方法で近道だということをよく知っているのです。私たちにとって何よりもつらく苦しいのは、だれにも愛されていない、自分はだれにも理解してもらえない、自分はだれからも必要とされていない、という否定的な思いにとらえられることでしょう。でも、たとえ人には愛されず、理解されず、また必要とされているとは思えなくても、イエス様だけは私の心の痛み、苦しみを知っていてくださる、いやそればかりか、ご自身のいのちに代えてまで愛してくださっていることを信じるなら、必ず解放されます。生きる希望がわいてきます。しかしサタンはあなたにも「ほんとうにあなたはイエス様に愛されていると思いますか」と耳もとでささやくのではないでしょうか。もちろんそれは、イエス様が私を愛していてくださるということは単なる思い込みだと思わせたいからです。第二の点は、蛇は強制することはしなかった、ということです。ここにはサタンとしかいいようのないもの、すなわちよこしまな力が私たちに働きかけるときの巧妙さが、これ以上ないほど明瞭に示されています。サタンは、私たちが強制されてではなく、自分の責任で罪におちることを望んでいるということでしょう。なぜなら、強制されて何かをしたとしても、私たちはその結果に対して責任を感じないでし

「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記2･27）

ょうが、自分の意思で何かをしたときは、その結果に一喜一憂し、ましてそれが取り返しのつかないほどのことであれば、私たちはほんとうの意味で惨めになるからです。

裸であることを知った

木の実を食べて、二人はどうなったのでしょうか。聖書にはこう記されています。

このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した（創世記　3･7、8）

「裸であることを知って腰のおおいを作った」とは何を意味するのでしょうか。それは、このときから人は「神に似せて、神のかたちに造られた」自分のすがた、いいかえるなら「神さまの目でご覧になって完全なものとして造られた」自分のすがたを、そのままでは受け入れることができなくなったということです。二人は神さまの目よりも自分たちの目に信頼を置きはじめました。自分の判断こそが正しいと考えはじめました。だから、身をおおうもの、自分を飾りたてるものがなければ安心できなくなりました。これは自分のありのままのすがたのなかに神さまの愛と満ちあふれる恵みを見いだすことができずに、むしろ愛の欠如を見いだすようになった、ということでしょう。私たち現代人の悩み、苦しみの原因の多くもまたここにあるのではないでしょうか。自分の「容姿」、「能力」、「境遇」といったものを受け入れることができずに、足りないところが気がかりで「もっと、もっと」という思いに捕らえられ、苦しくなっているのではないでしょうか。

その後二人は、神さまの声を聞いて「御顔を避けて園の木の間に身を隠した」ということです。不思議なことだと思います。赤ちゃんがお母さんの顔を避けて身を隠すなどということがありえましょうか。でも、神さまの格別の愛のうちに、神に似せて造られたものは、お造りくださった方から「隠れたい」と思うようになったのです。

さらに男は神さまに向かって「**あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。**」（**創世記3･12**）と言い、責任を妻に、ひいては妻を彼にくださった神さまに押しつけようとしました。たしかに事実は男の言うとおりでした。でも、彼は語らねばならないことを語ろうとはしませんでした。それは強制されてではなく、自分の意思で食べたということです。神さまのことばにそむいた人は、不正直な態度をとるようになりました。そのうち「神は恐れるに足りない」とうそぶくようになり、ついには「神などいない」と断言し、あからさまに神に敵対するようになりました。

もうお分かりいただいたことと思いますが、アダムとエバのすがたは決して特別なものではありません。むしろ、私たちのすがたそのものではないでしょうか。

あなたがたは自分の罪の中に死んでいた

はじめに戻りますと、神さまは人に「**善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ**」（**創世記2･17**）と仰せになりましたが、蛇は「**あなたがたは決して死にません**」（**創世記3･4**）と断言しました。事実はどうでしょうか。ふしぎなことに二人は死ななかったのです。では、神さまは嘘をつかれたのでしょうか。

ちょっと待っていただきたいと思います。神さまは「嘘をつく」ことがお出来にならない方なのです。では、死ななかった事実に関して考えられることは何でしょうか。実は、新約聖書を見ると「**あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた**」（**エペソ2･1**）と書かれているのです。これは、「救われた人」に向けて言われたことばです。ですから事実は、人は自分では分からなかったけれど、神さまの目から見れば死んでいたということです。もちろんそれが「肉体の死」ではなく、別の死を意味していることはいうまでもありません。

アダムとエバに神さまが仰せになった「死」は、「神さまにいただいた霊を失うこと」すなわち「霊的な死」のことであり、蛇が言ったのは「肉体の死」のことであった、と分かります。アダムとエバは「罪」のゆえに間違いなく霊において死んだのです。イエス様は「**いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。**」（**ヨハネ6･63**）と仰せになりました。私たちにとって本当に大切なのは「神さまとつながったいのち」であり、それはまことの神さまからいただく以外には手に入らないことを忘れてはなりません。

「霊的な死」とは抽象的、あるいは空想的なことがらではありません。木の実を食べた後のアダムとエバのすがたこそ、「霊」が死んだ人間のすがただといえば、これほど分かりやすいものはないでしょう。それは、ありのままの自分を受け入れることができない。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。
わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11･28）

しかし、何かがあれば自分の責任は認めようともせずに、自分こそ正しいと言い張る。それは、自分を中心に生きる生き方です。そこにあるものは、ひたすら愛されたい、認められたい、与えられたい、という満たされぬ思いと果てしなき欲望です。その結果が「争い」、「ねたみ」であり、行き着くところは「自己の偶像化」と「他人への憎しみ」なのではないでしょうか。このような状態では、たとえ肉体が生きていても、真の生きる喜びと希望がもてないのは当然でしょう。

人は「人生とはそういうものさ」と悟ったように言うかも知れません。でも、聖書は「そうではない」と告げています。喜びが内から永遠にわきあがる人生がある、と言うのです。

なし遂げてくださった救い

死にとらわれた人生の中におちた人間を生き返らせ、喜びと希望のある人生を歩ませるために、イエス様はこの世に来てくださいました。人の罪の問題を解決されるために、イエス様は「人」としてお生まれにならなければならなかったのです。なぜならば、神さまをないがしろにすることが、罪であり、それこそが人間から霊を失わせ、死にとらわれた人生を歩むことになった根本的な原因だからです。この私たちが生まれながらにもっている性質である「罪」の問題を解決するために、イエス様は十字架にかかって死んでくださいました。イエス様は神さまご自身でしたが、同時にあらゆる人間のうちでただ一人、神さまに似せて、神さまのかたちに、という神さまのお心どおりに生涯を保ちつづけられたお方でした。ですから、このお方は自分の罪のゆえに死ぬ方ではなかったのです。だからこそ十字架の上でのイエスさまの死は、「すべての人間の身代わりの死」でありえたのです。神さまは「**罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるため**」（**2コリント5･21**）だったのです。こうして今、神の恵みとイエス･キリストの恵みによる賜物、すなわちいのちの霊は多くの人々に満ちあふれるようになっています。

神さまがなし遂げてくださったこと、すなわち「救い」とは、私たちが何かをしたがゆえの報いではなく、恵みとしかいえないものです。なぜなら、イエス様の十字架の死と復活がなければ、どんなに努力をしても人は自分の「罪」の問題を解決しえず、本当の意味で自由にされることはありえないからです。幸いなことに、イエス･キリストの十字架の死と復活はこれから起こされる計画ではなく、もうなし遂げられた史上の事実です。ですから、私たちはただこの事実、すなわち「イエス様は私たちの罪のために死に渡され、私たちにいのちを与えるためによみがえられた」ということを信じ受け入れること、それだけで死にとらわれた状態から解放され、聖霊と永遠のいのちをいただくことができると聖書は言っています。イエス様はいつでも、こう私たちに呼びかけていてくださいます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（**マタイ11･28**）

裸の自分のすがたが、たとえどのように惨めなものであっても恐れる必要はない、わたしはありのままのあなたを愛しているのだから、「来なさい」と主は招いてくださいます。また、現在の状態がたとえどのように過酷で、つらいものであるとしても、わたしは自分のいのちに代えてまであなたを愛しているのだから、わたしの愛のうちで「休ませてあげる」と主はお仰せになっています。イエス様に信頼するなら、私たちは必ず生きる喜びと希望をいただくことができます。数えきれないほど多くの人々がイエス様のもとに重荷を下ろし、永遠のいのちをうけて、救いの喜びを経験しています。まさに聖書に書かれてあるとおりなのです。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。（**1コリント　1･18**）

古田公人
東京大学農学部教授　京都府出身、付属桃山中、桃山高、京都大学農学部卒



あなたは愛されている、あなたはもう孤独ではない。

重田定義

どなたでも簡単には治らない病気になったとき、しかも長期にわたって入院や療養治療を続けなくてはならず、回復の見通しもはっきりしないままに、つらい時を過ごさなくてはならなくなったとき、その方は肉体的な苦痛に加えて、焦燥感、孤独感、絶望感、あるいは死に対する恐怖感に打ちのめされることでしょう。そんなとき「自分は何と不幸なのだろう」という悲しみが沸き上がって来るのは当然のことです。そのようなときには親しい人の慰めの言葉もその方を幸せにすることはできないのではないでしょうか。

さらに重症になり、身の回りのことすら自分ではできなくなった病人が、何を幸せと感じるかを調べたある調査があります。それによりますと、そのようになった病人が幸せと感じるのは、自分の苦しみをほんとうに理解してもらうこと、自分を大切に扱ってもらうこと、死ぬ前には愛する家族といっしょにいること、などが圧倒的に多いということでした。これらの結果からみますと、病という重荷を負った方々の最大の願いは「愛されたい」ということに尽きるのではないでしょうか。

ある親しいドクターから次のようなお話を聞いたことがあります。医者としては手を尽くすことのできないほどガンの症状が進み、痛みのために夜も眠れず苦しんでおられた患者さんがありました。そのとき一人のナースがその患者さんの足を暖かいお湯で優しく洗ってあげたら、その患者さんはぐっすり眠ることができ、ドクターはたいへん心を打たれたというのです。なぜこの患者さんは痛みから解放され安眠することができたのでしょうか。ただ足を洗って気持がよくなったというだけではないでしょう。この患者さんは自分の足を優しく洗ってくれたナースの行為の中に自分が愛されているということを実感して心が幸せになり、平安になったので苦痛をも忘れて安眠できたのだと思います。

けれども人の愛にはどうしても限界があるのです。たとえば、病に苦しむ愛する方といつもいっしょにいてあげたいと思っても、いろいろな事情でなかなかそれが許されない、また同じ苦しみを分かち合ってあげたいと思っても、それも人にはできないことです。さらに、できることなら自分が代わってその苦しみを負ってあげたいと思っても、これも不可能なのです。このように、病む方々のために人がしてあげられること、与えてあげられる愛は、残念ながら限りのあるものなのです。

しかし、人に求めても得られない大きな愛を与えてくださる方がおられます。その方は天地万物の創造主である神様です。神様は、

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。（イザヤ　49･15～16）

とおっしゃるほどに私たち一人ひとりを限りなく愛してくださるお方であります。さらに聖書には次のような驚くべき神様の愛が記されています。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（1ヨハネ　4･9～10）

神様のご愛は、ご自分に背を向けて自分の思いを満たすことばかり追及している私たちの罪を、ひとり子の神イエス様に負わせて罰し、私たちに永遠のいのちを与えてくださるという、考えられないような大きな自己犠牲の上に立ったものでありました。そしてこの神様のみこころに従って天の御位を捨ててこの世に来てくださった神様のひとり子イエス様は次のようにおっしゃっています。

「人の子（イエス様を指す）が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」（マタイ　20･28）

ご自分が仕えられる立場であるはずの神の御子は、私たちに仕えてくださるために、そしてご自分のいのちを私たちのために捨ててくださるために、人としてこの世に来てくださったのです。なんという驚くべき大きな深い愛でしょうか。そのイエス様は次のように呼びかけておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11･28）

私たちのためにいのちを捨てるほどに愛してくださるイエス様をすなおに信じ、招きに応じてイエス様のもとに重荷を下ろした方は、どなたでも約束通りにイエス様から決して失われることのない、まことの安らぎをいただくことができます。

ここでニューヨークのあるリハビリテーション施設の壁に書かれた無記名の、ひとりの患者さんの「病者の祈り」と題した詩をご紹介したいと思います。

大事をなそうとして、
力を与えてほしいと神に求めたのに、
慎み深く従順であるようにと、
弱さを授かった。
より偉大なことができるように、
健康を求めたのに、
より良きことができるようにと、
病弱が与えられた。
幸せになろうとして、富を求めたのに、
賢明であるようにと、貧困を授かった。
世の人々の賞賛を得ようとして、
権力を求めたのに、
神の前にひざまずくようにと、
弱さを授かった。
人生を享楽しようと、
あらゆるものを求めたのに、
あらゆることを喜べるようにと、
いのちを授かった。
求めたものは、一つとして
与えられなかったが、
願いはすべて聞きとどけられた。
神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、
心の中に言い表せない祈りは
すべてかなえられた。
私はあらゆる人の中で
最も豊かに祝福されたのだ。

この患者さんはおそらく病気のためにからだに大きな障害が残り、失ったからだの機能を回復するためにこの施設に入っていたのでありましょう。けれども、期待していたような効果が得られなかったのではないでしょうか。「大事をするために力を、偉大なことができるために健康を、幸せになるために富を、世の人々の賞賛を得るために権力を、人生を楽しむためにあらゆるものを」というこの患者さんのかつての願望は、だれにも共通するものです。しかし病気によって彼のからだが不自由になった結果、この願望はすべて砕かれました。ふつうならば、そのようになったとき、人は我が身の不幸を嘆き悲しみ、自己憐憫に陥り、他人をうらやみ、絶望してしまうのではないでしょうか。しかし彼は「慎み深く従順であるようにと、弱さを授かった」「より良きことができるようにと、病弱が与えられた」「賢明であるようにと、貧困を授かった」「神の前にひざまずくようにと、弱さを授かった」「あらゆることを喜べるようにと、いのちを授かった」「神の意にそわぬ者であるにかかわらず、心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた。私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ」と確信し、その喜びを壁に刻んだのであります。いったいどうしてこのように変えられ、このように言い切れるのでしょうか。それはこの患者さんが自分のような者をも愛してくださるまことの神様の愛を知ったことによって、ほんとうの幸せを見つけたからなのです。ほんとうの幸せは自分の願望が満たされることではなく、自分を心から愛してくださる神様、自分のためにいのちを捨てるほど愛してくださる神の御子イエス様に、自分のすべてをおゆだねすることであると知ったからであります。

しかし、この患者さんばかりではありません。イエス様をご自分の救い主としてお受け入れになればどなたでも、たとえからだが病気や怪我で動かせなくなっても、口がきけなくなっても、痴呆になっても、また死が間近かに迫っても、心は幸せに満たされて喜ぶことができます。それはあなたを愛してくださる神様、イエス様がともにいてくださり、大きな愛でいつもあなたを包んでくださっていることをあなたが知るようになるからです。

まだイエス様をご存じないで病気で苦しんでおられる方は、どうか、「わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。」と呼びかけておられるイエス様のみもとに一刻も早くおいでになり、病気から生じるすべての重荷を、不安を、恐れを下ろしていただき、神様から愛され、永遠のいのちを与えられている者として、幸せに満ち足りて、神様のご愛を日々心から喜び楽しむことがおできになりますようにせつにお祈り致します。

重田定義
東海大学医学部名誉教授　府立四中、慶應義塾大学医学部専門部卒、東海大学医学部教授、在任中、同学部「医の倫理委員会」委員長を務めた。「私達の国籍は天にあります」など著書多数　東京都出身



イエスさま、ありがとう！

片桐俊文

もしかしたら、あなたは、「自分のだめさ」にうんざりしているかもしれないし、「もうだめだ」と、希望を失いかけているかもしれない。そのうえ、ひとりぼっちかもしれません。なにをどう考えたらいいのか、どこから手をつけたらいいのか、さっぱりわからないかもしれない。しかしどんなときでも、私たちにいちばん必要なことは、「イエスさまご自身をはっきりと見ること」であり、「イエスさまのことで心がいっぱいになること」です。悩みの中にいるときこそ、イエスさまに出会ってほしい。だからイエスさまのことをお話ししましょう。

まずは、こんな質問からはじめましょう。「あなたは、どこから来たのか」。こたえは、「お父さんお母さんが私を産んでくれた」ですよね。では、そのお父さんお母さんはどこから来たのでしょう。おじいさんと、おばあさんから。そして、これをどんどんとさかのぼっていくと、人間の祖先に行きつきますよね。では人間の祖先はどこから来たのでしょうか。聖書は、こう言っています。

そして神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。（創世記1・27）

このようにして、人間は神さまによって造られました。その人間に、神さまはおっしゃいました。

「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それをとって食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記2・17）と。ところがアダムは、ずるがしこい蛇にそそのかされたエバにさそわれて、つい、善悪の知識の木の実を食べてしまいました。そしてふたりは、自分たちが恥ずかしくなり、心がとがめて**「神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」（創世記3・8）**のです。つまり、アダムは、神さまのおっしゃることを聞かなかったばかりか、神さまから逃げるようになってしまったのです。

これが、人間の「罪」のはじまりです。「原罪（げんざい）」といわれていて、私たちが生まれたときからからだの中にもっている、罪の性質です。私たちみんながもっている、「神さまなんか知らない」、「神さまにさからいたい」、「わがままをしたい」、「悪いことをしたい」、「なまけたい」、「ひとをいじめたい」、「盗みたい」などという性質です。この罪の性質は、自分でおさえようとしても、なかなかおさえられません。だって、その罪の性質は、すべての人が生まれつきその中に閉じこめられてしまっている性質なのですから。そしてこの罪の中に閉じこめられているかぎり、あなたはかぎりなく不安で、恐れ、迷い、悩み、いじめられ、いじめ、生きる苦しさからからぬけだすことができない、と聖書は教えています。

「罪から来る報酬は死です。」（ローマ6・23）。

ではどうすればいいのでしょうか。私たちはいつまでも、この罪の中で苦しみあがき、ほろんでいかなければならないのでしょうか。いいえ、そうではありません。そうではないのです。さきほどの、「罪から来る報酬は死です。」のあとに続いて、聖書にはすばらしいみことばが書いてあるのです。

「しかし、神の下さる賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」（ローマ6・23）。

さて、罪という暗いことばかりを書きましたから、こんどはもっと明るくたのしいこと、うれしいこと、イエスさまのことをお話ししましょう。もういちど、さっきと同じような質問をしましょうね。「イエスさまはどこから来られたのでしょう」。答えはこうです。イエスさまは、この天地を造られた神のひとり子でありながら、人の姿をとって、2000年前にこの地上に来てくださったのです。そして、十字架につけられ、血を流し、いのちを捨ててくださいました。なぜでしょうか。なんのためでしょうか。それはイエスさまが、私たちのもっているあらゆる罪と罪の性質をせおって、私たちの身代りのぎせいとなって死んでくださることによって、「神さまが、私たちの罪を赦してくださる」ためです。そして、さっきの聖書のみことばにあったように、イエスさまにある、永遠のいのち、すばらしいいのちをくださるためです。これが、イエスさまによる「救い」です。イエスさまは、私たちを罪の中から救いだすために、この地上に来てくださったのです。イエスさまこそは、私たちの「救い主」です。そして、この十字架のみわざによって、人間は罪を赦され、罪から解放され、ほんとうの平安と永遠のいのちをいただくことができたのです。

イエスさまが十字架におつきになったありさまを、聖書からもうすこし見てみましょう。新約聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書のおしまいのほうにあります。どうかあなたも読んでみてください。かいつまんで言えばこういうことです。

そのころの人々は、自分かってなわがまま、悪い思い、欲、利益のために、イエスさまをでたらめな裁判にかけ、あざけり、ののしり、むち打ち、つばきをはきかけて十字架につけてしまいました。イエスさまは神の子であられ、なんの罪も、罪の性質ももっておられないにもかかわらずです。あなたは十字架につかれるイエスさまのことを読むとき、きっと苦しまれるイエスさまのお顔がまざまざと目に浮かぶことでしょう。イエスさまのおからだからは貴い血が流れ出しています。太陽ははげしく照りつけ、人々のあざけりののしる声が聞こえてきます。でもイエスさまは何にもおっしゃいません。この苦しさを、じっとあなたのために耐えておられます。あなたの罪の身代りとなって。

そのイエスさまの十字架のお姿を心の目で、しっかりと見上げましょう。そのときあたりは暗くなり、三時まで続きました。さいごにイエスさまは大声で祈って息をひきとられました。苦しみ悩む人々を心からあわれまれ、人々と苦しみをともにし、貧しいもの、悲しむものをよろこびで満たし、苦しみをとりのぞき、悪霊までも追い出だされたイエスさまが、いま、死んでいかれる。なにも悪いことなどしなかったのに、イエスさまは死んでいかれる！「それは私のためなんだ。この私がじぶんで負わなければならなかった罪を、イエス様が代わりに負ってくださった。私の罪のために死なれた。ごめんなさいイエス様！」このように心の中で叫ぶことのできる人は、なんと幸いなことでしょう。なぜなら、このように心の中で叫ぶ人は、もう、神さまに赦されて、救われているからです。神さまの子供となり、そして平安なまことのいのち、イエスさまにある永遠のいのちをいただく者になっているからです。

このように、イエスさまに叫ぶことのできたあなたに、最後の質問しましょう。「あなたはいま、どれだけ幸せでしょうか」と。思い出してください。イエスさまが十字架について死んでくださったことによって、あなたの罪、アダムからはじまった人間の中の罪の性質は、もう赦されてしまいました。罪は、イエスさまのぎせいの死で、神の前に贖われた（もう罪とはされなくなった）のです。これが福音です。

それだけではなく、イエスさまの十字架を受け入れた人々はみんな、あなたの大好きなあの人も、この人も、そしてあまり好きでなかったあの人も、この人も、みんなイエスさまのたいせつな子供になってしまっているのです。イエスさまは、十字架につかれたあと、よみがえられて、いまは天の御国におられて、いつもいつも私たちに目を注ぎ、愛し、導いてくださっているのです。もう、なんの心配があるでしょう。悩みがあるでしょう。すべては、イエスさまが心配し、導き、いちばんいいようにしてくださるのですから。だから、「ばんざーい」です。「イエスさま、ありがとうございます」です。このように「ありがとう！」と叫べるなら、いま私たちの苦しみ、悩みは力を失います。もう、苦しむことも、こわがることもないのです。ただよろこびましょう。感謝しましょう。私たちがなにか立派な人になったからではない。宗教を信じたからではない。ただイエスさまがだめな私たちを愛し、いつくしんでくださるから、私たちはしあわせなのです。たしかに、あなたはいま、だめなひとです。でも永遠のいのちを与えられています。よい子になれない。でも大いに愛されています。

まだ、イエスさまにすなおに「ありがとう」と言えなかったみなさん、あなたも、イエスさまに、こう言ってみてください。「イエスさま、ごめんなさい。イエスさま、ありがとう」と。そのときから、あなたはすばらしいイエスさまの恵みとよろこびの中に、そして、ほんとうのしあわせの中に移されているのです。

主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。（ゼパニヤ3:17）

片桐俊文
大丸合成薬品（株）勤務
東京都出身、富士見中、都立武蔵丘高、
多摩美術大学芸術学部大学院卒、
苦しみを持つ子どもたちに長年かかわってきた。





左から、夫の故八郎さん、千恵子さん、長女 敬子さん、長男 真一さん

イエス様の奇しい導き

宮崎千恵子

1938年福岡県大牟田市に生まれる。三池小、歴木中、三池高卒業。1961年宮崎八郎さんと結婚。家族は長女敬子さん、長男真一さん。

主人が天に召されて1年、記念会と納骨を済ますことができ、心から感謝しております。
そのすべてを、主がととのえてくださり、キリスト集会のみなさまがたと主を賛美し、お祈りを捧げることができました。

私たち家族がイエス様に出会い、救われるまでのことをお伝えしたいと思います。

平成11年4月のこと、主は主人の前に一人のキリスト集会の方を置いてくださいました。
その方はイエス様のことを伝えに来てくださったのです。でも、そのときは、特別に心に響くこともなく、それから1年余りはイエス様のことは頭の中から消えていました。

そのころ、わが家ではいろいろな問題をかかえていました。主人の健康も気がかりでしたが、なんといっても息子のことが心配でなりませんでした。
息子は心の病を患い、平成7年、東京の仕事を辞めて家に戻り、入退院を繰り返していました。息子と顔を合わせるたびに、私は「寝てばかりいてどうするの。そんなことではいつまでも社会復帰はできないよ」と口うるさくとがめていたのです。そんな日々の中で、昨年9月下旬、息子は突然、私に暴力をふるいました。あまりのできごとに、私はとまどい、悩みになやんだ末、ご近所の方にうちあけました。その方はすでにイエス様を知っておられ、ちょうどその日が祈り会の日でもあったので、そこへつれて行ってくださいました。その祈り会に出て初めて、キリスト集会のみなさまが1年余りの間、私たち家族のために祈り続けてくださったことを知りました。

私はかつて、主人の病のため新興宗教に走ったことがあり、いわゆる宗教団体はお金がつきものだと思い込んでいました。ですから、祈り会で、ただ聖書のみことばを信じ、イエス様にすべてを祈り,おまかせし、もちろんそういうことに何の対価も必要ないことを知り、本当に驚きました。感激しました。そのとき、ある方がみことばを記した2枚のカードをくださいました。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（コリント　10･13）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11･28）

これらのみことばは私の心に深く響きました。くり返し、くり返し、読みました。そして心の底から「心の重荷から開放されたい」「試練から脱出したい」と思いました。

11月11日、ベックさんが私たち未信者のために来てくださり、「悔い改める心」「感謝の心」「すべてを主にゆだねる心」この三つのことを、聖書にふれたこともない私たちにわかりやすく伝えてくださいました。主人は、そのときベックさんがくださった「基礎的なみことば」という小冊子の最終ページにあるお祈りを、それからの毎日、まるで幼児のように祈っていました。そして主人は12月10日、イエス様に従う者として公に証しをするため、洗礼を受けました。

そこに至る道も決して平坦なものではありませんでした。そのころまだサタンの支配下にいた私は、主人の阿蘇よろこびの集いへの参加を、「寒いから」「風邪をひくから」など、いろいろな理由をあげて、やめさせようとしました。

それでも万能の主は,主人をあわれんで守ってくださり、みこころにかなった集会のある方を,差し向けてくださったのです。主人はその方にお会いすると同時に、「今日は天気がよいですね、お世話になります。よろしくお願いします」と、最初から参加することを決めていたように言いましたので、私は驚きました。

そして、そんな主人に引きずられるように、私自身も、なぜだかわかりませんが、変えられていきました。「同じ信仰を私も持ちたい」「イエス様こそ本当の神だ」と思うようになったのです。それだけではありません。息子もイエス様を受け入れ、東京で暮らしている娘までが吉祥寺キリスト集会に集うようになって、結局、主人だけでなく、家族全員そろって洗礼に授かったのです。今までの生涯の中で最高の輝かしい、うれしいときでした。

こうして21世紀最初の新年は20年ぶりに家族が主イエス様のもとに結ばれ、明るく楽しく過ごすことができました。けれども、そのときは、まさかこれが主人の最後のお正月になることなど思いもよりませんでした。

私は息子のことを通して主に救っていただいたことを思いました。主人といっしょに祈る穏やかな日々を過ごしていました。主人の病気や息子の心の病がよくなることはありませんでしたが、何一つ変わりない日々の生活の中で、主は霊の糧、心の平安という大きな恵みをくださいました。そして、試練からの脱出とはこういうことだったのだと気づかせてくださいました。主は私に何とすばらしい恵みをくださったのかと感謝の気持ちでいっぱいでした。
やがて主人と私は、ほどなく主人が召されるというご計画があることを知らぬまま、春日で開かれている礼拝や家庭集会に喜んで出るようになりました。

その主人が楽しみにしていた礼拝出席も、2月4日が最後となり、2月12日意識障害を起こして入院、4月13日天に召されていきました。その約2カ月の間も、私たちは主のあわれみと恵みの中で主の時を静かに待つことができました。たびたびお見舞いに来てくださるキリスト集会の皆様が聖歌の賛美をしてくださり、祈ってくださることを唯一の喜びとしていました。

主はそこでも、ある方との不思議な出会いを用意してくださいました。あとでわかったことなのですが、その方と私の母とがお友だちで、私の母はよく、「大へんお世話になったのよ」と言っていたのです。そんな昔の日々から、イエス様は今日のことをご計画してくださっていたと思うとき、深い愛に感謝の涙が流れました。
その出会いから約3週間、その方とともに朝な夕な賛美し、祈ることができました。

聖書をひもといたこともなかった主人を救ってくださった主は、こういうすばらしいことも備えてくださいました。
召されるそのときまで、皆様といっしょに賛美し、祈ることができました。何と幸せな旅立ちだったでしょう。主の大きな愛と,恵みをただただ感謝しました。

キリスト集会の皆様の熱いお祈りと、主が結んでくださった多くの方々とのかかわり合いの中で、親族も心を開き、イエス様を中心とした葬儀を心よく許してくれました。主はすべてを備えてくださいました。主を放っておいて自分の思いでことを運ぼうとすると、その通りにならないことも、にぶい私に気づかせてくださいました。
主人のあとを慕って、これから主のみもとに行く旅路を、ただイエス様だけに頼り、従っていきたいと思っております。

主は生きておられる

伊野朱美

高知県南国市に生まれる。日章小、香南中、丸ノ内高、東邦音楽大学短期ピアノ科卒。自宅教室兼、ヤマハ・エレクトーン講師を経て、ナショナル・テクニトーン講師。
1999年4月乳癌再発のため、教室閉鎖。現在治療中。家族は夫豊さん、夫の母留子さん。







左から、朱美さん、夫豊さん

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。それは、主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。
（詩篇　27・1、4、5）

私は高知県南国市に生まれました。両親、祖父母、妹、弟の7人家族の中で育ちました。幼い頃、私は心臓が弱く家で酸素吸入をしていたそうです。ですから、中学生の頃、「人は死ぬと何処へ行くのだろう?なぜ死ぬのだろう?」という疑問を持つようになりました。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。（ローマ　6・23）

わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。―神である主の御告げ。―だから、悔い改めて、生きよ。（エゼキエル　18・32）

大学を卒業し、ヤマハ・エレクトーン講師として4年間働きました。そこで、自分の力の限界を感じました。人前で演奏しても、自己顕示だけで演奏していたので、弾き終わると心の中はむなしさだけでした。ヤマハを辞めてすぐナショナルから誘いがあり、講師として働くことになりました。この時も「人より先を歩かなくては」と思い、がんばりました。

そんな頃、主人と出会い、28歳の秋に結婚しました。私たちには子どもが与えられませんでした。主人は自動車修理工場を、私も教室を開き、お互い順調でしたが、中学生の頃に抱いた不安がまた持ち上がってきました。いろいろな本を読みましたが、回答らしきものは出てきませんでした。ある日,本屋で「聖書と預言」という本に出会い、読み始めました。どうも聖書に私の捜している答えがあるような気がして、聖書をさがしましたが、手に入りませんでした。私は、諦めていました。

その頃、高知キリスト集会では聖歌の伴奏をする人がなく、皆さんが伴奏者が与えられるよう祈っておられたそうです。その集会には、野中さんという生徒さんのお母様がおられ、その方にある本を読むようにと勧められましたが、よくわかりませんでした。その方にお電話したところ、「私にはわからないのでベックさんという方が、月に一度、高知に来られるのでお話を聞いてみたら?」と言われました。この疑問の答えが得られるならと、ふたつ返事でお受けしました。また、聖書を売っている本屋さんを紹介していただき、聖書にめぐり会うことができました。

日曜日の夜でした。主人の運転で、竹本さんのお宅に伺いました。その頃の私はイエス様はイスラエルの神様で十字架上で死なれたことしか知りませんでした。ベックさんからイエス様が十字架について、いのちを捨てて、私たちの罪を赦してくださったということ、そして今も生きていらっしゃるということを聞いたとき、目の前が、ぱーっと明るくなるようでした。「イエス様についていきたい」と思いました。ベックさんの後について祈りました。私が長い間求めていた答えが、ここにある気がしました。ベックさんは「3つのことを忘れないように。聖書を読むこと。祈ること。集会に集うこと」と助言してくださいました。外で待っていた主人のほうにも足を向けてくださり、「また来月会いましょう」と、堅く握手をしてくださいました。私は、次の日曜日から子供集会で奏楽をするようになりました。今は天の御国で憩っておられる岡本さんが、とても喜ばれ、礼拝の中で泣きながら奏楽者が与えられたことを感謝して祈っておられました。私はとても驚きました。今の私は、ピアノを弾く体力はないのですが、感謝なことに奏楽のほうは、イエス様が残してくださり、賛美させていただいています。

私たち夫婦は、ある晩大喧嘩をしました。車に乗って出て行く主人の後を追って私も乗りました。私は車の中で祈りました。「イエス様ごめんなさい……」このとき、主人も救われていっしょに天国へ行って欲しいと心から思いました。主人に謝り、イエス様のことをお話しました。

ある夜「今日は私が聖書を読むから聞いてね」と言って読み始めました。ヨハネの17章でした。読んでいるうちに涙が溢れ、主人が傍にいるのも忘れて、おいおい泣きながら読み続け、イエス様にお祈りしていました。その年の8月、高知のよろこびの集いで、私たち夫婦は、洗礼を受け、主イエス様を信じていくことを証しすることができました。

1993年10月。私の父が急に悪くなり、入院して5日目に召されました。父は意識をなくし、人工呼吸器を2日目につけました。その夜、高熱の中、一晩中父は涙を流し続けました。きっとイエス様の前に出ていたのでしょう。イエス様のあわれみと救いの恵みを確信し、嬉しくなりました。

主の聖徒たちの死は主の目に尊い。（詩篇 116・15）

1996年10月には主人の父が召されました。前立腺がんの後、3回の脳梗塞を起こしました。多くの方々が見舞ってくださり、祈ってくださいました。

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたし（イエス様）を信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」（ヨハネ　14・1～4）

二人の父は、この世の旅路を終え、天の御国でイエス様とともに憩っていると安心しています。いずれ私も天に召され、イエス様のおそばに行き、そこで父たちが「おかえり!」と迎えてくれる再会の日を楽しみにしています。

私は、1997年9月に、乳がんのため右胸を全摘しました。1999年3月には乳がん再発により、肺にがんが転移しているのが見つかり、高知医大に転院。抗がん剤治療を受けました。多くの方々の祈りとみことばに支えられ、70日の後に退院しました。この時から酸素が必要になり、在宅酸素を使うようになりました。

主は、2000年3月に、福音を伝えるため、「Musik Freunde Willkommen」の音楽会を高知で開いてくださいました。私の住んでいる夜須町の会場に100名のキリスト集会の方々が出演してくださり、喜びに満ちあふれるコンサートとなりました。600の席がいっぱいになりました。私は以前、西軽井沢にある国際福音センターで開かれている音楽会を、生徒さんたちにぜひ聴いてもらいたく、祈りながらバスツアーの参加者を募りましたが、誰一人参加者はありませんでした。高知での音楽会は、ベックさんのお話もあり、メサイアも歌われ、主の御栄光が輝くものとなりました。イエス様は、この病を通して、子どもたちだけでなく、父兄や家族、親戚、友人や多くの方々に福音と賛美を聴いていただけるようにしてくださいました。本当に大きな恵み、感謝でした。11月に4度目の入院をしました。抗がん剤治療は6回目でした。同室の方も同じ日に同じ治療を受けられ、苦しみをともにいたしました。この入院中、検査の結果、胸膜に新しくがんができ、肺に水が溜まっていることがわかりました。「どうしてまた?」という思いになりました。しかし、イエス様はこの病を通して、同じ病で悩んでいる方々のために祈ること、そして主の愛を伝えることを教えてくださいました。私は,「音楽会を通して救われる魂が起こされなければ、やる意味がない」という思いに、いつの間にかなっていて、「救いは主のもの」ということを忘れていました。今はわからなくても、イエス様はいつも最善をなすお方。主にとって無駄なことは何ひとつないのです。「イエス様ごめんなさい。そしてありがとう。イエス様だけが輝かれますように」。2001年5月、肺に溜まった水のため、呼吸困難の日々を半年近く過ごしていましたので、医師のすすめで、肺と胸膜の癒着術を受けました。

わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられからである。
（ヘブル 12・5、6）

「わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」
（1コリント 12・9）

とても痛みを伴う治療でした。治療中は、イエス様のご栄光とご臨在を祈っていました。今は水も抜け、呼吸も楽になりました。来年、ドイツで開かれるよろこびの集いに参加できれば、と祈っています。

私たちのために祈っていてくださる世界各地の方々に、心から感謝し、主の御名を賛美申しあげます。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。
（テサロニケ　5・10）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。
主イエスよ、来てください。（黙示　22・20）

まことの命に満たされて

飯島夏樹

1966年東京都八王子市に生まれる。八王子東高校、琉球大学卒。ウインド・サーフィンのプロとして88年より6年間ワールドカップで世界転戦。グアムココス島にてマリンスポーツ業を自営。妻寛子さん、小夏さん、双子の寛さん、吾郎さん、多時さん。

私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしい事よ。風を追うようなものだ。（伝道者の書　1・14）

まさにこのみことばに、僕の10数年に及ぶ選手生活のすべてが集約されています。
僕は20歳の頃からプロのウィンドサーファーとしてワールドカップを転戦する生活を送っていました。ハワイに拠点を置きながら、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、カリブの島々と、旅をして回る日々です。その華やかさの裏にある勝負の世界はとても厳しく、また旅が忙しく、いつも孤独で、色々な経験をしました。

有名になることは人の心の奥深い部分をくすぐり、気持ちの良いものですが、もともと同じ人間なのに、いつも人より勝っていることをアピールし続けなければならない、背伸び競争の連続で、大変疲れるものでした。

また、「人はどのように生きるべきか」を捜し求めて、世界の海をさまよっていました。僕はどんなすてきな所に行っても、結局は満たされない自分からは離れることができなかったのです。後に主に出会った時、僕の捜し求めていたものは、こんなに近くにあったのかと驚きました。遠くのまだ見ぬ世界の果てではなく、自分の心の中に。

主との出会い

僕がイエス様に出会ったのは、ひょんなことからグアムで仕事を始めることになり、リゾートでのマリンスポーツの経営を始めた頃のことでした。同郷の親友であるキリスト集会の古田雅一君の結婚式に西軽井沢国際福音センターに招待されました。
当時の僕は利己的で、自分のスケジュールを最優先させていましたから、わざわざグアムから出席しないはずなのですが、なぜかこの時は西軽井沢まで行ったのです。福音センターの前に立った時、印象的だったのは、そこに集まった多くの方々の喜びにあふれた嬉しそうな笑顔と、久しぶりに会う雅一君が、そんな皆さんにすてきな笑顔であいさつをしている姿でした。

なんであんなに無防備に、心を開くことができるのだろうか？ またあの喜びあふれる笑顔は、どこから出てくるのだろうか?とても不思議に思いました。

左から、長女 小夏さん、夏樹さん、後方 長男寛さん、前方 妻寛子さん、次男 吾郎さん

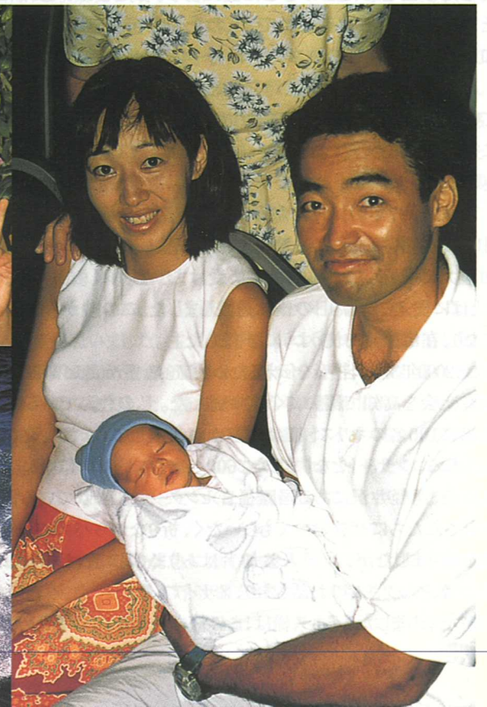


妻寛子さんの母、福田名水子さん





中央、三男 多時さん



半日をそこで過ごしましたが、結婚式、茶話会でのお話などなどまったく記憶にありません。その笑顔だけがとても印象に残り、どうやら聖書とやらにその秘密が隠されていることだけわかりグアムに戻りました。
その後グアムでプロテスタントの福音教会があると知り、日本から来られた宣教師に、聖書の学びをしていただくことになりました。
それから聖書を読んでいくと、人生のからくりがすべてここに書いてあることが示され、目が開かれました。僕の探していた答えが全てここに書かれていたのです。

「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ　8・32）

そして次のみことばに突き当たりました。

「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」（マタイ　6・34）

ああ、もう明日の心配をしなくていいのだと、心の底から軽くなり、楽になりました。それまでは常に風や波を読んで、ミスをしないように、先のことを考え、いつも備えをし、いつ来るかわからない波や風に合わせるために全身全霊を傾けて過ごしていたのです。ちょっとでも時間があれば明日のため、将来のためにあれをしておこう、いやこれも、という生活でしたので、明日の心配は無用とのみことばに、本当に楽になりました。

その後、聖書を読んだりキリスト集会の方々のお話を聞いたりして、神に従わない罪をイエス様が十字架にかかっていのちを投げ出して身代わりになって赦してくださったこと、私たちにまことの永遠のいのちをくださったこと、また、イエス様はよみがえって天に昇り、今も私を愛してくださること、そしていつか再び来られることを知り、心の底から、このお方に従って行こうと思うようになりました。
その後、宣教師の第1期宣教が終わりに迫っていたので、洗礼を受けたいとの思いが強くなり、希望で、よくわからないままにあっという間に夫婦そろって洗礼を受けました。

教会生活、信仰の歩み

その後、宣教師が日本に戻られたので教会は中心になる方がなくなり、教会には男性が私だけでしたので、教会の方々の勧めで、あっという間に福音教会の会長に任命されました。救われて3ヶ月でした。
それからは週報作り、礼拝祈祷、役員会に忙しく、はては宣教師の再任の反対運動まで起こりました。10人くらいの日本人の集まりでしたが、牧師もおらず、このままでは教会が存続できなくなるのではと危惧し、ハワイの日系教会の牧師に相談したり、一見活気のありそうなよその教会に顔を出したり、どの道がよいのかと全力で探っていました。妻は僕が牧師にでもなってしまうのではないかと、はらはらしていたそうです。
雅一君の母の古田康子さんは結婚式のあとから、ベックさんのメッセージのテープを欠かさず送ってくださり、それが生きる水となり、信仰生活の成長の支えとなりました。しかしメッセージテープで学ぶことと、実際の教会の現状はずいぶんと違うものでした。
教会でイエス様の話しを皆で分かち合いたい、と思っても、なぜか違う話題になってしまうもどかしさ。信仰とは自己否定のはずなのに、なにか自分のために神に祈ってばかりいるようで、満たされない気分でした。
その結果、教会内での古い方々とのはざまで疲れ果て、喜びがなくなり、律法的になり、妻を裁くようになり、ついには自分の意志により頼んでがんばる自分が、べしゃんこにさせられてしまいました。そしてイエス様だけに従いたいとの思いが強くなり、教会に行けなくなってしまいました。
妻は教会に勝手に行かなくなった夫の責任まで背負いこみ、教会学校のこともあり、その後も無理をして教会に通っていましたがそれも半年が限界で、問題に突き当たり、教会に行くことができなくなりました。

グアムキリスト集会の始まり

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。　（ローマ　9・16）

そしてキリスト集会の方々の祈りに支えられ、2000年の1月にベックさんが来られることになりました。

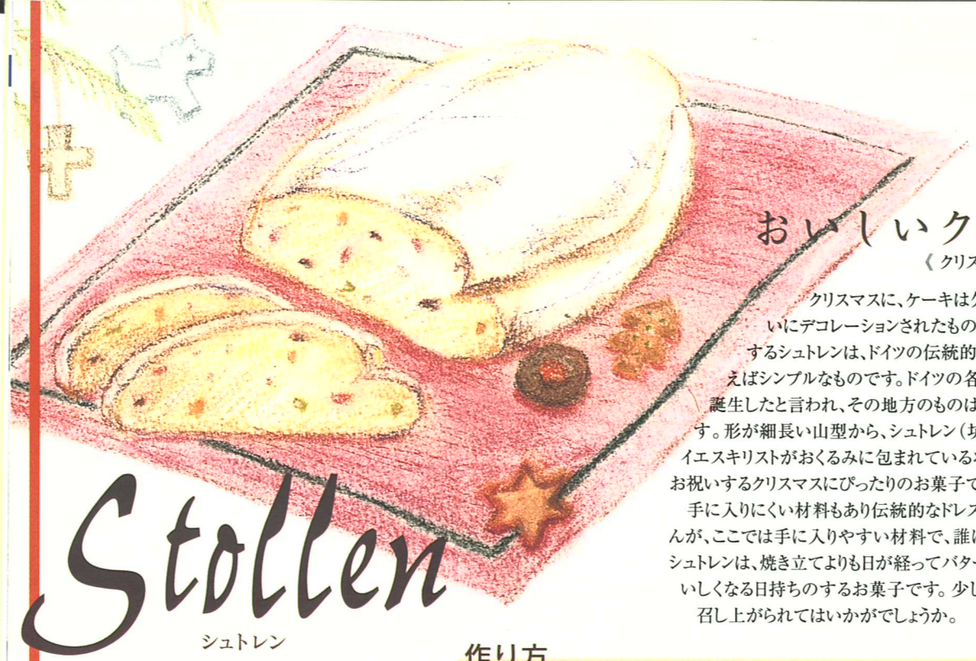
主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

時を同じくして妻も救いの確信を持つことができました。また、東京に住み新興宗教に入っていた義母の福田名水子さんが突然、まことの神に出会い、罪を悔い改めてイエス様を信じ、救われ、洗礼を受けるにいたりました。
それからです。日本からメッセンジャーの方々が来られるたびに、一人また一人と多くの方々がイエス様を信じ、救われました。まざまざと主の働きを見せていただき、また主は自分の古い肉の性質をみことばや環境を通して砕いてくださり、主に祈り、主に語り、主とともに生きる日々を与えてくださいました。本当に感謝の日々です。
それから、カナダよろこびの集いにも家族で参加しました。ほんとうにすばらしい日々でした。
それまでは信仰生活とこの世の生活のはざまで、どちらかというと、この世の生活の方にウェイトが高かったのですが、それからはみごとに逆転しました。「この世は天国までの準備期間である」と。夫婦の一人一人が主につながっていると、家族で送る日々の生活はまさに天国にいるように平安です。

私の口には一日中、あなたの讃美と、あなたの光栄が満ちています。（詩篇　71・8）

主はつねに生きて働かれ、僕らによろこびと平安を与えたいと願っておられることが、身に沁みてわかります。なにもできない自分に絶望し、また愛のない自分に絶望していますが、古い肉にある僕が死ねば死ぬほどに新しい、まことのいのちに満たされることを感じます。
一人でも多くの方々が、イエス様のもとに行けますようにと、毎朝、グアムの静かな海に向って祈っています。

喜ぶものといっしょに喜び、泣くものといっしょに泣きなさい。互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低いものに順応しなさい。自分こそ知者だなどと思ってはいけません。　（ローマ　12・15、16）



Stollen

シュトレン

ビッキーのケーキづくり

おいしいクリスマス

《 クリスマスに シュトレンを作ってみよう 》

クリスマスに、ケーキは欠かせないものになっています。きれいにデコレーションされたものなどいろいろありますがここで紹介するシュトレンは、ドイツの伝統的なクリスマスお菓子で、どちらかといえばシンプルなものです。ドイツの各家庭で作られますが、ドレスデンで誕生したと言われ、その地方のものは「シュトレンの王様」と言われています。形が細長い山型から、シュトレン（坑道）と呼ばれていますが、みどりごイエスキリストがおくるみに包まれている状態とも言われ、イエス様の誕生をお祝いするクリスマスにぴったりのお菓子です。

手に入りにくい材料もあり伝統的なドレスデンのシュトレンのようにはいきませんが、ここでは手に入りやすい材料で、誰にでも作れるレシピになっています。シュトレンは、焼き立てよりも日が経ってバターやフルーツの香りがなじむとよりおいしくなる日持ちのするお菓子です。少し早めに作って今年のクリスマスに召し上がられてはいかがでしょうか。　ブリギッテ・野口〔ビッキー〕

材料（すべて常温に戻しておく）

生地

材料A
- 薄力粉 250g
- 砂糖 100g
- ミルク 125cc
- ドライイースト 8〜10g
- ナツメグ 少々
- 塩 小さじ1
- レモンの皮半個分
- バター 100g（有塩バターで良い）

中身

材料B
- アーモンドダイス 35g
- フルーツビッツ 70g（他のナッツやフルーツに変えても良い）

仕上げ
- バター 40gぐらい
- 粉砂糖 25gぐらい



道具

ボール　台　スケッパー
めん棒　クッキングシート

作り方

















充分に冷ましてから、乾燥しないようにビニル袋などに入れて涼しいところに保存します。一晩おいたらバターがなじみます。薄く切って召し上がれ。



本格的なシュトレンを作りたい方は、ミンヘン・ベックさんの著書『ベックさんのドイツ菓子』をご覧ください。





特集　フォトスケッチ

ヨーロッパ よろこびの集い



見よ。兄弟たちが一つになって
共に住むことは、なんというしあわせ、
なんという楽しさであろう。（詩篇133・1）

キリスト集会では、1994年から始まったドイツやスイスの「よろこびの集い」に、毎年、数百人の方々が参加しています。ドイツ・アイドリンゲンの「ディアコニセ・ムッターハウス」は、ヴィーバーン姉が福音を伝えるために始めたもので、幼稚園、保育園、老人ホーム、看護学校、バイブル・コース、バイブル・キャンプなど活動は多岐に渡り、ドイツはじめ世界中で大きな尊敬を集めています。なかでもミヘルスベルグで開かれる「よろこびの集い」は、静かなドイツの森で快適な宿泊施設に泊まり、約1週間、聖書を学び、仲良く語り合う楽しい集いです。また、この「よろこびの集い」は、ベックさんが卒業された神学校のあるスイス・ベアーテンベルグでも開かれ、ユングフラウの秀峰を望む景勝の地でも開催されています。日本で、ただ純粋に聖書だけに立ったキリスト集会が生まれ育ったのは、ドイツ、スイスの主にある兄弟姉妹がたの長年にわたる祈りに主が答えられ、ベックさんを日本に遣わし、まことの信仰と福音が伝えられた結果です。







あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。（1コリント1・30）





よろこびの集い

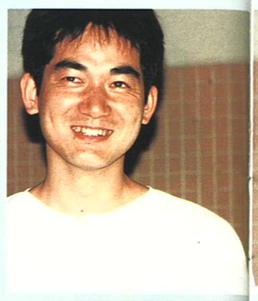
すべての国々よ。主をほめたたえよ。
すべての民よ。主をほめ歌え。

（詩篇　117・1）

キリスト集会では、各地の日曜礼拝・福音集会、家庭集会などと並行して、毎週のように全国のどこかで「よろこびの集い」を開催しています。よろこびの集いでは、主を礼拝し、聖歌を賛美し、聖書のみことばがメッセージをとおして語られ、さらにはイエス様からいただいた試練や恵み、よろこびなどが証しとして語られたりします。また洗礼式や祈り会、赤ちゃんの祝福式、故人の記念式、ときにはコンサートも開かれます。すべて自由参加ですから、キリスト集会に集っている人だけでなく、信仰を持っていない方も多数参加します。地域的には、近隣の人のほか、北は北海道から南は沖縄まで、ときには海外からも参加者があります。

そして、ホールや大広間を備えた宿泊施設で寝食を共にしながら、自由時間には親密な語り合いが行われ、たくさんの出会いもあります。
よろこびの集いがイエス様を知るきかけとなり、救いにつながった例は少なくありません。信者の多くは霊的に満たされ、元気になって帰途につきます。日程は土曜、日曜の2日間が普通ですが、西軽井沢国際福音センター（長野県御代田町）で開くときは3日間、海外の集いでは4日ないし1週間になります。どうぞ気軽にご参加ください。集いの中心であられるイエス様は、愛そのもののお方です。きっとあたたかく迎えてくださるでしょう。






神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。（IIペテロ　1・2）









この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。（マタイ　18・14）











聖徒の集まりで主への賛美を。（詩篇　149・1）







わたしとともに主をほめよ。共に、御名をあがめよう。（詩篇　34・3）



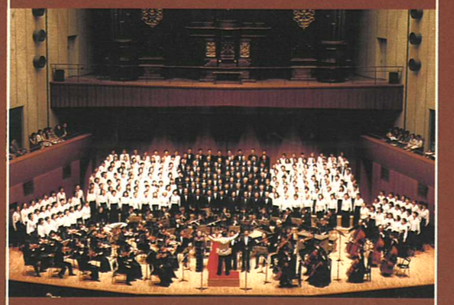

福岡に響いた「メサイア」の賛美

音楽を通してイエス様を賛美し、喜び、紹介したい――キリスト集会では、こんな思いの人たちが合唱団と合奏団をつくって演奏活動をしています。ヘンデル作曲オラトリオ「メサイア」の全曲演奏もその一つです。今年は7月22日に福岡公演＝写真＝、9月1日に東京公演がそれぞれ行われました。福岡では「生演奏でメサイア全曲を聴くのは初めて」という聴衆も多く、イエス様への思いを込めた熱演に、会場の福岡市立西市民センターは大きな感動に包まれました。



天に響く賛美の歌声！ メサイア2001秋の演奏会

東京公演は、池袋の東京芸術劇場大ホールで、開かれ、出演者全員中西規夫さんの指揮のもと、心を一つに、救世主であるイエス・キリストの救いのみわざを、高らかに歌い上げました。
当日はベックさんによるお話もあり、ご来場の方々も満席で、はじめてイエス様のすばらしい福音に触れた方々も多く、感激して帰られました。なお、このメサイアの演奏会は、すでに1993年から少しずつ練習を積み重ね、ほぼ年1回のペースで演奏会が行われてきているものです。この演奏は、通常のコンサートではなく、すべてイエス様への感謝と賛美のために捧げられるものです。



よろこびへのコンサート

西軽井沢国際福音センターでは例年、新年と5月のゴールデンウイーク、8月の夏休みに「よろこびへのコンサート」を開いています。今年5月には、来訪中のドイツ人キリスト者を前に、ハイドン作曲「天地創造」を初めて演奏しました。

あおぞらひろば

まことに、あなたがたに告げます。
あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、
決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

日曜学校のお世話をしている方たちのお祈り会の後で、ある人が、こんな発言をされました。
「子どもに教える立場のようでありながら、実は、教えられることばかりだわ。」
その場にいた全員が、大きくうなづいてしまいました。
子どもの特徴は、正直、素直です。心に起こる疑問や、喜怒哀楽を、小さい子どもほど、隠そうとしません。
けれど、子どもなりに罪の芽ももっていて、大人たちがドッキリさせられることもあります。
このコーナーでは、毎回、多くの方からお寄せいただいた原稿を通して、
さまざまな子どもたちのよこがおを紹介していきたいと思います。
さて、創刊号にもさっそく、こんなあったかエピソードが寄せられましたよ！

一番大切なひと

あるとき、息子に「パパにとって一番大切なひとって、だあれ?」と質問されました。
すぐに子どもたちの名前、それから妻の名を答えました。妻は、「それから」とつけ足されたことに、気分を害しているようでした。
すると息子が、「ふうん。イエス様じゃないのかー。」と言ったのです。このとき思わず、「なーんだ（そういうことか）。」と、つぶやいてしまいました。
次の瞬間、息子の質問よりも、「なんだ」と言った自分自身に驚いていました。「なんだそういうことか、そう言ってくれれば、イエス様と答えたのに」と思った自分に気づいたからです。
言い換えれば、「そう言われなかったら」イエス様とは答えないのが私なのです。イエス様に従うつもりでいながら、いつの間にか「この世の顔」と「イエス様への顔」の二つの顔を持っているように感じました。
そして、息子の質問に答えたのは、つまり、いつも息子たちに向けているのは、「この世の顔」の私だったのです。
一方、子どもたちは、いつも一つの顔しか持っていません。もちろん「イエス様への顔」だけです。
息子の一言で、あらためて自分の信仰の未熟さに気づかされました。「それから」とつけ足されたことで気分を害していた妻も、同じ気持ちだったのかもしれません。

大雨の帰り道

夏の日曜学校キャンプの思い出です。20人くらいの小学生と遠足に行きました。
高学年の男の子たちは、小さな子どもをおいて、さっさと山道を登って行きます。
「みんなそろって行きたかったのに。」自分勝手に行動している大きな子たちに、つい腹を立て、きびしく叱ってしまいました。
一人の子は、怒られたことでへそを曲げ、口もきいてくれなくなりました。せっかくの遠足なのに、気まずい雰囲気です。「またまた失敗。イエス様、助けてください!」
帰り道は、もっと大変になりました。途中で道を間違え、おまけに突然、青空が消えて雨が降りだしました。一人の子は疲れから発熱し、歩けなくなってしまいました。
雨はだんだん強くなってきます。私ども奉仕者の方が、心細くなってしまいました。
しかし、帰りの子どもたちは違っていました。互いに協力し、励まし合い、大人が背負っていた具合の悪い子を、「交代でおぶるよ」と言ってくれたりもしました。
「雨だけど、みんなで祈ろうよ。」ということばも、子どもたちからのものでした。
賛美の歌も、自然に口ずさまれていたのです。さっきまでへそを曲げていた高学年の男の子たちが、頼もしく見えました。そして、みんなで、心一つになって、キャンプ場へ戻って来たのです。
これは小さな一つのエピソードですが、日々、困難や失敗さえ喜びに変えられる主を、子どもよりはるか後ろから仰がせていただいています。







あるとき、日曜学校のお世話をしている方が病気になりました。多くの子どもたちから、心のこもったかわいいお手紙が、たくさん届けられました。ぜんぶをご紹介できなくて残念ですが、その中から2通をご紹介します。

手じゅつをすると聞いて、びっくりしました。
それより、なぜか、こわくなってきました。
なみだがにじんできました。
心配になったけれど、
イエス様が守ってくださることを思いだしました。
こんなときこそ、イエス様にしんらいして
イエス様によりたのむことが大切だと思います。
こんなちっぽけなわたしだけど、
はげましの手紙を書くことはできると思いました。
お祈りしています。
（原文まま）

ぼくは、ままから。
Ａちゃんが　びよきにかかった　と
いったときに　びっくりした。
なでかというと、Ａちゃんが
びよきになるだけで　すごい
かなしいからです。
でも　ぼくは　ままに
いいことばを　おそわりました。
このことばが　Ａちゃんへの　なくさめ
なれば　うれしいです、おそれるな
わたしは
あなたとともにいる
ということばです、しゅじゅつが
せいこうするように　いのります。
（原文まま）

私たちを救うために来てくださったイエス様！

**私たちを救うために、
この地上に来てくださったイエス様。**

イエス様がお生まれになったとき、御使いは言いました。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせにきたのです。」（ルカ2・10）と。イエス様は主なる神のひとり子でありながら、人間の姿をとってこの地上に遣わされ、後に十字架につかれて私たちの罪を贖い、解放してくださる救い主として、お生まれになったのです。クリスマスとは、本来はイエス様のご降誕を偲んで、主の前に静まり、喜びにひたり、家族そろって感謝の祈りを捧げる日です。

「Xmas」とはとんでもない！

しかし日本では、クリスマスの本来の意味はそっちのけで、ケーキやプレゼントを売るための年末大商戦の名目になっています。赤い衣装のサンタクロースやトナカイの橇が運ぶプレゼントといったイメージは、20世紀の始めに、コカコーラ社がポスターで宣伝して今のような姿に定着したようですが、何の根拠もなく、もちろん聖書には存在しません。聖書のみに立っているキリスト集会のクリスマスには、サンタクロースは登場しません。また、Xmasという不思議な表記も、実はとんでもない意味を持っています。Xは正体不明の人物、また数学の未知数を表しますからXmasは正体のわからない人への礼拝、偶像崇拝の意味となり、主イエス様に対してこんな失礼な、言語道断な表記の仕方はありません。

なぜ馬小屋で？

聖書によると、イエス様のご誕生のありさまは、次のようでした。当時の人々は、命令により、住民登録をするためにそれぞれの出身地に帰らなければなりませんでした。身重のマリヤとヨセフも、住んでいたナザレから、実に 150キロも離れたベツレヘムに帰りました。それは何と困難な旅だったことでしょう。ルカ2章6-7節にはこうあります。「そこで、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」宿屋は各地から帰ってきた人々で一杯でした。イエス様が生まれられるというのに、この二人には満足な部屋もなく、もちろん火もお湯も、出産に必要なものは何一つなかったのです。「飼葉おけに寝かせた」とありますから、そこにはベッドはもちろん椅子も、テーブルもなかったのです。なぜ、このような最も貧しい状態で、イエス様はお生まれになったのでしょうか。それは、イエス様が、この世の、貧しく、悩み、苦しんでいる人々のためにこそ、この地上にきてくださったことを、主がはっきりとお示しになるためです。イエス様ご自身が、「貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。」と、イザヤ書を引用して語っておられます（ルカ4・18）。イエス様は、苦しみ、悩み、貧しく、病に痛んでいる人々のためにこの地上に来てくださり、この世に生きることの苦しみを身をもって体験してくださり、人間のすべての罪を一身に背負って、十字架におつきになり、身代わりとなって私たちを救い出してくださり、よみがえり、今も天の右の座について万物を支配し、そして私たちに愛の目を注ぎ、愛していてくださっているのです。

私たちには365日がクリスマス。

このことを考えるとき、私たちは、イエス様の愛と恵みにひれ伏して感謝しないではいられません。単にクリスマスの日だけでなく、一年 365日、いつも、イエス様が来てくださったこと、十字架の救いのみわざを成し遂げてくださったこと、そして私たちのような者にも救いの恵みをくださったことを感謝し、賛美し、そして祈らずにはいられません。私たちには、一日一日が、クリスマス。それは、なんという喜びでしょう。

イエス様をお伝えするよい機会として。

しかしまた、一方で、子供のころ、日曜学校や知人のクリスマスの集いに招かれて、おいしいケーキやみことばのカードをいただいた経験を持つ方は多いのではないでしょうか。そして、生涯のある時に、主がその方に声をかけ、招いてくださった時、このような経験を持つ方は、イエス様の呼びかけに、すなおに耳を傾けることが多いようです。私たちも、12月のクリスマスという主の備えられた時を活かして、イエス様をまだご存知ない方々を家庭集会などにお招きし、イエス様のすばらしい福音を伝えるよい機会として活かすことができますように、主に祈りましょう。

クリスマスプレゼントにイエス様のビデオを！

「シーザス」と「シーザスと子供たち」というすてきなビデオテープをお分けしています。「シーザス」はイエス様のご生涯を聖書に忠実に描いた大作で、「シーザスと子供たち」は、イエス様の時代に生きた子供たちの目を通して見たイエス様の物語です。いずれも価格は500円で、巻末に紹介した各地のキリスト集会にあります。ぜひご覧ください。

ベツレヘムの星を推理する

イエス様がお生まれになったとき、東方の博士たちが星に導かれてやってきました（マタイ2章）。彼らの道案内となった「ベツレヘムの星」とは、どんな天体たったのてしょうか。

このナゾについては、さまざまな天文学的考察がなされてきましたが、最近有力視されているのは「金星と木星の出会い」説です。

東方の博士たちはおそらくバビロンあたりの天文学者（星占い）て、夜空の星々の配置に精通していた、と思われます。その博士らの目を奪った特別の星、しかも導き役となる「動く星」となると、候補にのぼるのは惑星と彗星です。このうち彗星は2000年前にさかのぼって捜すことは困難です。ということて、「ベツレヘムの星」捜しの対象は、もっぱら惑星に絞られてきた、と言えます。

そして、主な惑星については過去3000年から1000年先までの位置がコンピュータで計算済みで、その膨大なデータの中から見つかったのが先に述べた「金星と木星の出会い」です。

紀元前2年6月17日夜（バビロン時間）、二つの惑星は肉眼では見分けられないほど接近して、西空（ベツレヘムの方向）に現れました。一等星の中でも飛び切り輝く金星と、それに次く非常に目立つ木星、この二つの星が「一つの星」となった光景はどんな大事なものだったてしょう。しかも、その出会いが獅子座でおこったことも暗示的です。獅子はユダヤ人のシンボル（創世記49・9）たからです。

もちろん以上は天文学的な一つの推理にすぎません。ほんとうのことは、「主のみがご存知」です。（Y）

きょうダビデの町で、
あなたがたのために、
救い主がお生まれになりました。
この方こそ主キリストです。ルカ 2.1

Merry Christmas





7/28　森崎 剛・いずみ
8/04　韓 長慶・啓子
8/19　戸塚 一成・優理子





結婚

